奥ホリ遺跡発掘調査報告

―― 三重県多気郡多気町牧 ――

1 9 9 9 ・ 3

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は、平成10年度県営畜産経営環境整備事業（多気勢和地区）に伴って実施した奥ホリ（おくほり）遺跡の発掘調査報告書である。

2．奥ホリ遺跡は、三重県多気郡多気町牧小字奥ホリに位置している。

3．調査体制は、下記によった。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査第一課

第１係長　竹内　英昭（調整）

主　事　松葉　和也

研修員　柴山　圭子

整理担当　　三重県埋蔵文化財センター　資料普及グループ

4．当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課、及び資料普及グループが行った。また、本文の執筆・編集・写真撮影は、柴山の補助を得、松葉が行った。

5．本書作成にあたっては、奥義次氏（三重県立度会高等学校）、田村陽一氏（三重県立相可高等学校）のご教示を得、石材鑑定は、磯部克氏（三重県立松阪高等学校）に依頼した。

6．本書で使用した方位は、全て真北で示している。当地域の磁北は西偏６°20′である。

7．本書で使用した遺構表示記号は、以下の通りである。

ＳＡ：柱列　　ＳＫ：土坑　　ＳＤ：溝

8．当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

9．調査にあたっては、地元多気町牧地区をはじめ、三重県農林水産商工部農芸畜産振興課、松阪地方県民局農林商工部、多気町教育委員会からの協力を得た。

現地作業については、以下の方々の参加をいただいた。記して感謝の意を表したい。

（地元）

坂田ハルエ、高瀬鶴代、西村賀代子、松田幸弘、村川浩、山本利己、山本昌子

（50音順、敬称略）

（教員研修）

小林万高（三重県立相可高等学校）、平田直子（伊勢市立大湊小学校）、榊原玲子（同）、森井元美（同）、岡田保美（伊勢市立北浜小学校）、橋本久美子（明和町立明星小学校）

（順不同、敬称略）

10．当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

11．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　言 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 2
Ⅲ　発掘調査の成果 …… 7
Ⅳ　結　語 ……21

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　遺跡地形図 …… 3
第３図　調査区位置図 …… 4
第４図　調査区平面図及び土層断面図 …… 5 ・ 6
第５図　SK30・SK34・SK35・SK56・SK3 ・SK6 ・SK38平面図及び断面図 …… 8
第６図　ＳＡ65・ＳＡ66平面図及び断面図 …… 9
第７図　縄文土器実測図（１） ……12
第８図　縄文土器実測図（２） ……13
第９図　縄文土器・弥生～中世の遺物 ……14
第10図　石器実測図（１） ……16
第11図　石器実測図（２） ……17
第12図　石器実測図（３） ……18

表　目　次

第１表　柱列一覧表 …… 9
第２表　溝一覧表 …… 9
第３表　土坑一覧表 …… 9 ・10
第４表　土器観察表 ……18～20
第５表　石器観察表 ……21

図　版　目　次

図版１　Ｄ地区全景 ……23
　　Ａ地区・Ｂ地区・Ｃ地区全景、ＳＫ34 ……23
図版２　縄文土器 ……24
図版３　縄文土器 ……25
　　石器 ……25
図版４　石器 ……26
　　出土遺物 ……26

Ⅰ. 前　　言

1　調査の契機

奥ホリ遺跡は約21,000㎡におよぶ周知の遺跡である。また、近辺にもいくつかの遺跡が従来から知られていた。平成９年度に県営畜産経営環境整備事業（多気勢和地区）がこの地域で実施されることになり、試掘調査を行うことになった。

平成８年11月12日の試掘調査では、21か所の試掘坑を設定し、実施した。その結果、12,000㎡について遺構が存在しているものと判断した。

その後の関係部局との協議を重ねた結果、平成10年度事業予定地内については、工法変更をすることにより遺跡の保存に努め、深く掘削する水路設置部分の600㎡については発掘調査を実施し、記録保存を図ることになった。

2　調査の経過

（１）調査経過

奥ホリ遺跡の発掘調査は平成10年７月27日から開始し、同年９月４日に終了した。調査面積は、幅約３ｍ×全長約200ｍの約600㎡であった。

（２）調査日誌（抄）

７月27日　重機による表土掘削開始。午後雨天中止。
７月28日　雨天中止。
７月29日　包含層掘削。
　Ａ地区遺構、遺物ともほとんどなし。
　Ｂ地区土坑数基確認。縄文土器出土。
　Ｄ地区縄文土器出土。
　小地区Ａ～Ｄまで通し番号で設定。
８月３日　作業員初日。Ａ地区の検出、掘削ほぼ終了。遺物若干出土。
８月４日　遺構掘削、検出。
８月５日　連日猛暑。遺構掘削、検出。
８月６日　重機による下層確認調査。無しと判断。
　18番付近から縄文土器、石器出土。
８月７日　遺構掘削、検出。ＳＫ25から弥生土器出土。
　奥義次氏来訪。御教示を得る。
８月10日　遺構掘削。根石を持つＰｉｔ数個。
８月11日　遺構掘削、検出。風倒木から縄文土器口縁部、底部出土。
８月12日　ＳＫ30他、土坑一部検出。縄文後期土器出土。
８月18日　遺構掘削。土坑写真撮影。
　午後雨天のため作業中止。
８月20日　遺構掘削、検出。
８月21日　遺構掘削。ＳＫ42は中世の遺構。埋土下に縄文の包含層有り。
８月24日　38～46番上層遺構写真撮影、実測。
　47番以降、遺構検出。縄文の面確認。
　Ａ・Ｂ地区、遺構清掃。遺構写真撮影。
８月25日　Ｃ地区清掃、遺構写真撮影。
　38～46番掘り下げ。
　46番以降、遺構掘削終了。
　実測用３ｍメッシュ設定。
　午後から豪雨、夕方雷雨。
８月26日　昨夜からの雨のため作業員中止。
　37番まで遺構実測終了。
８月27日　遺構掘削、検出。
８月28日　遺構掘削、検出終了。
　Ｄ地区清掃、遺構写真撮影。
　道具清掃。作業員終了。
　遺構実測すべて終了。
８月31日　遺構レベル計測。
９月１日　遺構レベル計測。土層断面図作成。
９月２日　道具撤収。
９月４日　現地確認。発掘調査終了。

Ⅱ 位 置 と 環 境

多気郡多気町内を流れる櫛田川は三重、奈良両県境の高見山に源を発する。その後1市4町1村を貫き、伊勢湾へと注ぐ。

奥ホリ遺跡（1）は、この櫛田川中流域の河岸段丘面にある。この場所は、川が大きく北に曲流し、広い段丘面を形成している。この面にはいくつかの遺跡が立地するが、本遺跡はその先端に位置する。段丘面は標高約38mで、河床面からは約7mの比高がある。

以下には、この付近の遺跡を概観したい。

1　縄文時代

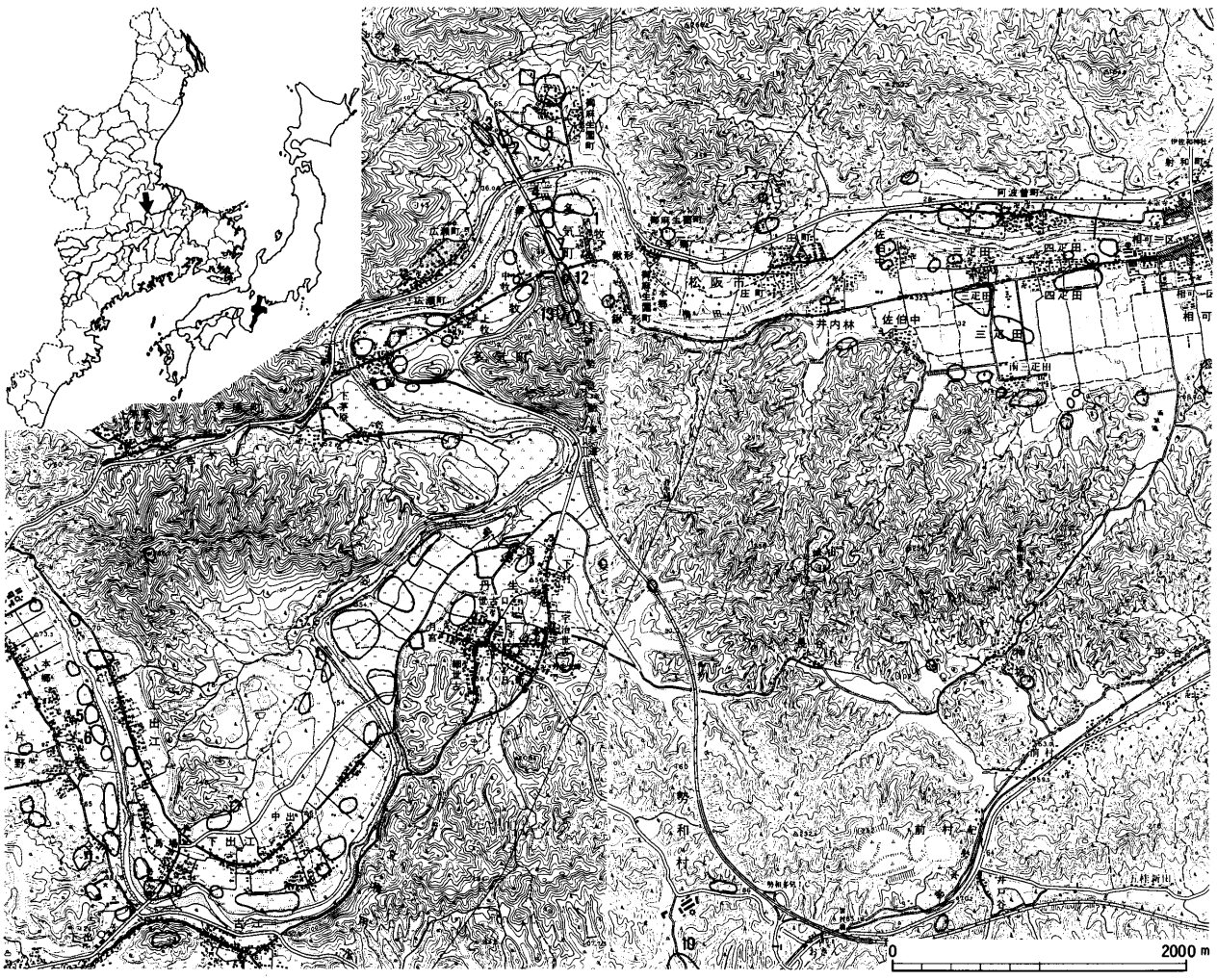
対岸には、早期の押型文土器が出土した大原堀遺跡[1]（2）や、上ノ広遺跡[2]（3）がある。本遺跡に隣接する花ノ木遺跡（4）でも押型文土器が出土している[3]。縁通庵遺跡（5）、アカリ遺跡（6）は、前期後半の土器が出土している[4]。浅間山南遺跡（7）では中期の土器・石器が出土している[5]。王子広遺跡（8）は、後期前葉の遺跡である[6]。後期後半には、新神馬場遺跡（9）がある[7]。1967年と翌年に発掘調査が行われ、トレンチ調査であったにも関わらず、4,000点もの遺物の出土があった。元住吉山式から宮滝式を中心とする遺跡で、この時期の櫛田川流域を代表する拠点的な遺跡だと考えられている。晩期には、池ノ谷遺跡（10）がある[8]。

2　弥生時代

花ノ木遺跡では、弥生時代中期中葉の竪穴住居や方形周溝墓、土坑が検出されている[9]。

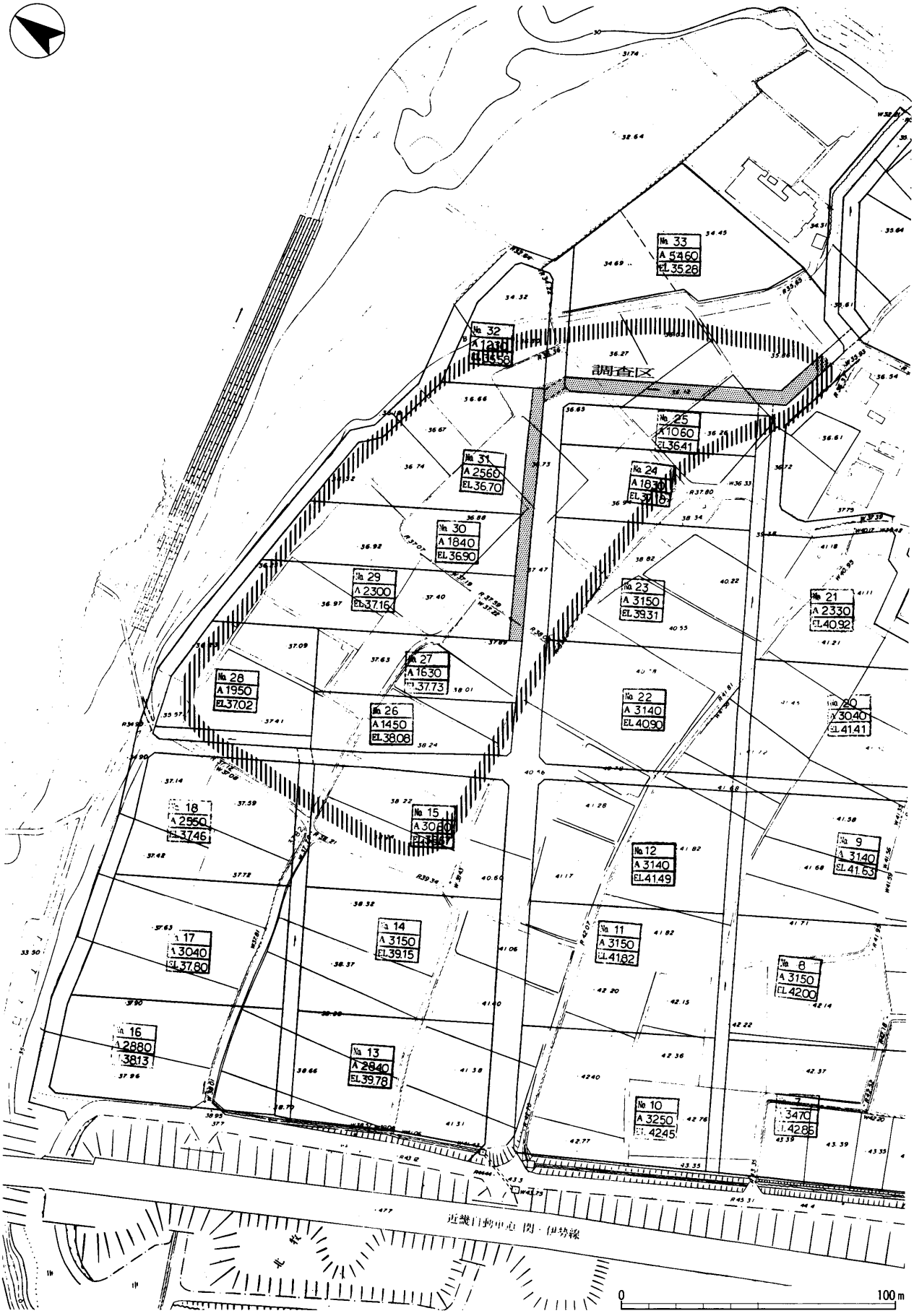
3　中世

釈尊寺遺跡[10]（11）は15世紀頃の集落跡である。他には、鍬形中世墓群[11]（12）や牧城跡（13）がある。

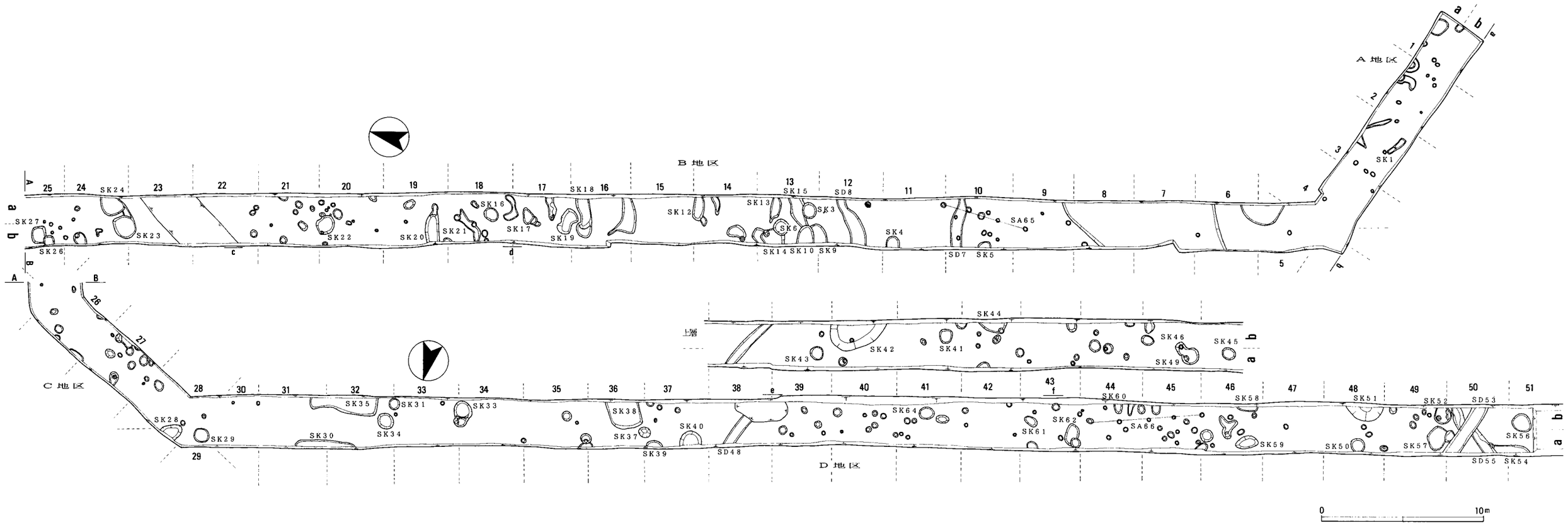


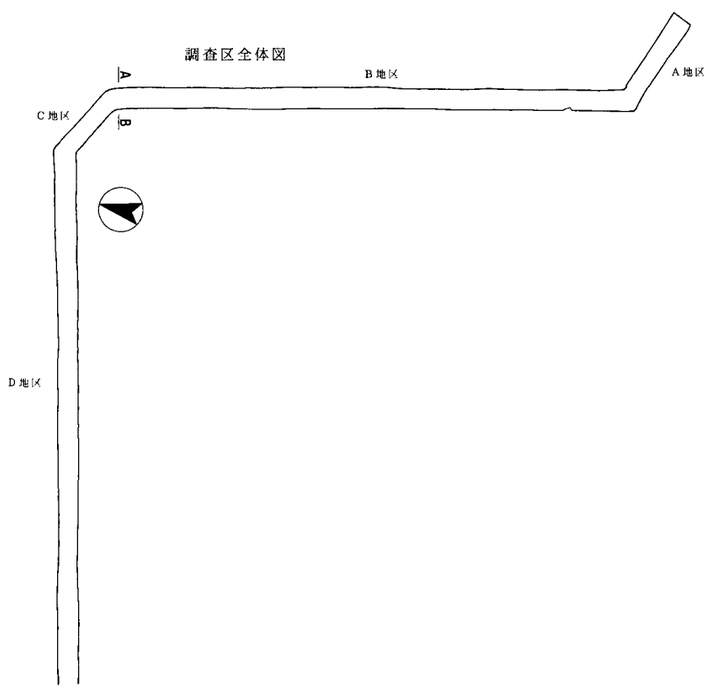
第1図　遺跡位置図（1：50,000）

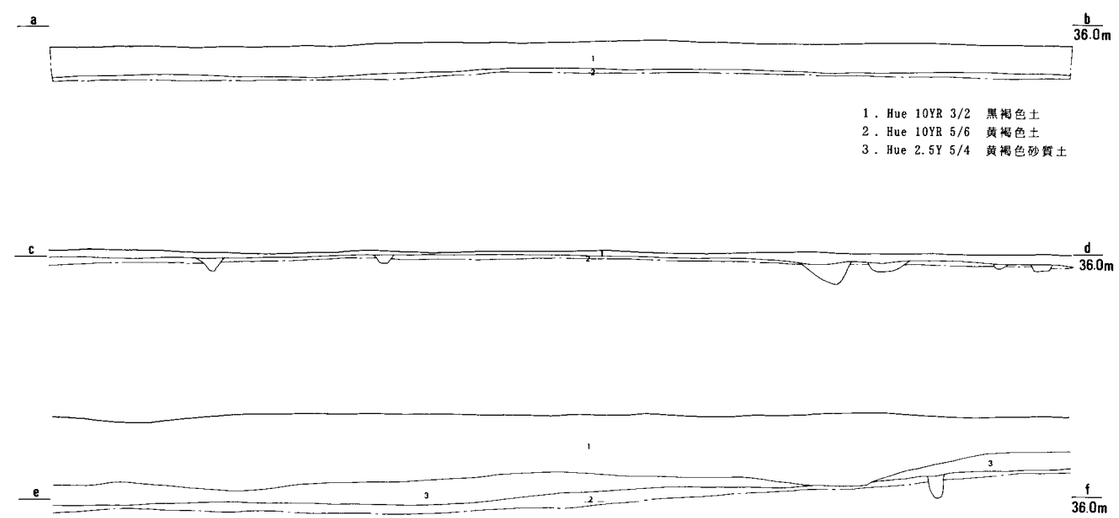
第2図　遺跡地形図（1：5,000）



第3図　調査区位置図（1：2,000）







第４図　調査区平面図（1：250）及び土層断面図（1：100）

Ⅲ　発掘調査の成果

1　調査の方法

本遺跡は表面積600㎡である。掘削は表土については重機掘削を行った。それ以外は人力による掘削である。また、約110㎡では下層確認を試みた。

調査区は幅約３ｍ、全長約200ｍという水路設置部分である。３か所で屈曲する平面形のため、小地区設定はメッシュによる設定ではなく、水路方向に合わせて設定した。したがって、屈曲部分では小地区の重複がある。

遺構図面・土層図面については縮尺１/20で作成した。また、重要性が認められた遺構については縮尺１/10で作成している。

2　層序

本遺跡の現状は水田である。調査区の基本層序は次のとおりである。

Ⅰ　表土

Ⅱ　黒褐色土

Ⅲ　黄褐色土（検出面）

Ⅳ　灰黄褐色砂質土

Ⅱは遺物包含層に相当する。Ⅲでは縄文時代から中世の遺構を検出した。Ⅲ以下に遺物は認められなかった。

3　遺構

検出した遺構は、縄文時代と中世に大別できる。以下には、いくつかを取り上げて記述する。他は遺構一覧表を参照されたい。

(1)　縄文時代の遺構

縄文時代の遺物は多く出土したものの、住居跡と思われる遺構を検出することはできなかった。しかし、縄文時代のものと思われる土坑をいくつか検出することができた。

ＳＫ30（第５図）　ａ31・32に位置する。北壁沿いに細長く検出した。そのほとんどが調査区外へ出ると思われ、平面形は不明である。長辺が約3.8ｍで深さは約0.2ｍである。検出は一部分であるが、底面は比較的なだらかで、竪穴住居の可能性も残されているだろう。

ＳＫ34（第５図）　ｂ32に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は、長軸約1.1ｍ、短軸約0.9ｍで、深さは約0.2ｍである。礫が数個検出され、半円を描くように周囲に巡らされている。礫は全てが自然礫であった。埋土からは、縄文土器小片とサヌカイトの剝片が出土している。土坑内や周囲には、焼土は確認できず、礫の被熱も認められなかった。礫の配置を、本来は一周するものであったと積極的に考えれば、配石遺構だととらえることができる。調査区内での検出は、この一基のみである。嬉野町天白遺跡に、この類例をみることができる。

ＳＫ35（第５図）　ｂ31・32に位置する。南壁沿いに細長く検出した。そのほとんどが調査区外へ出ると思われ、平面形は不明である。長辺が約4.3ｍで深さは約0.2ｍである。検出は一部分であるが、底面は比較的なだらかで、ＳＫ30同様に竪穴住居の可能性も残されているだろう。

ＳＫ56（第５図）　ｂ51に位置する。平面形は、やや楕円形で、長軸約1.2ｍ、短軸約1.1ｍである。深さは約0.2ｍである。

(2)　中世の遺構

柱列と土坑を検出した。

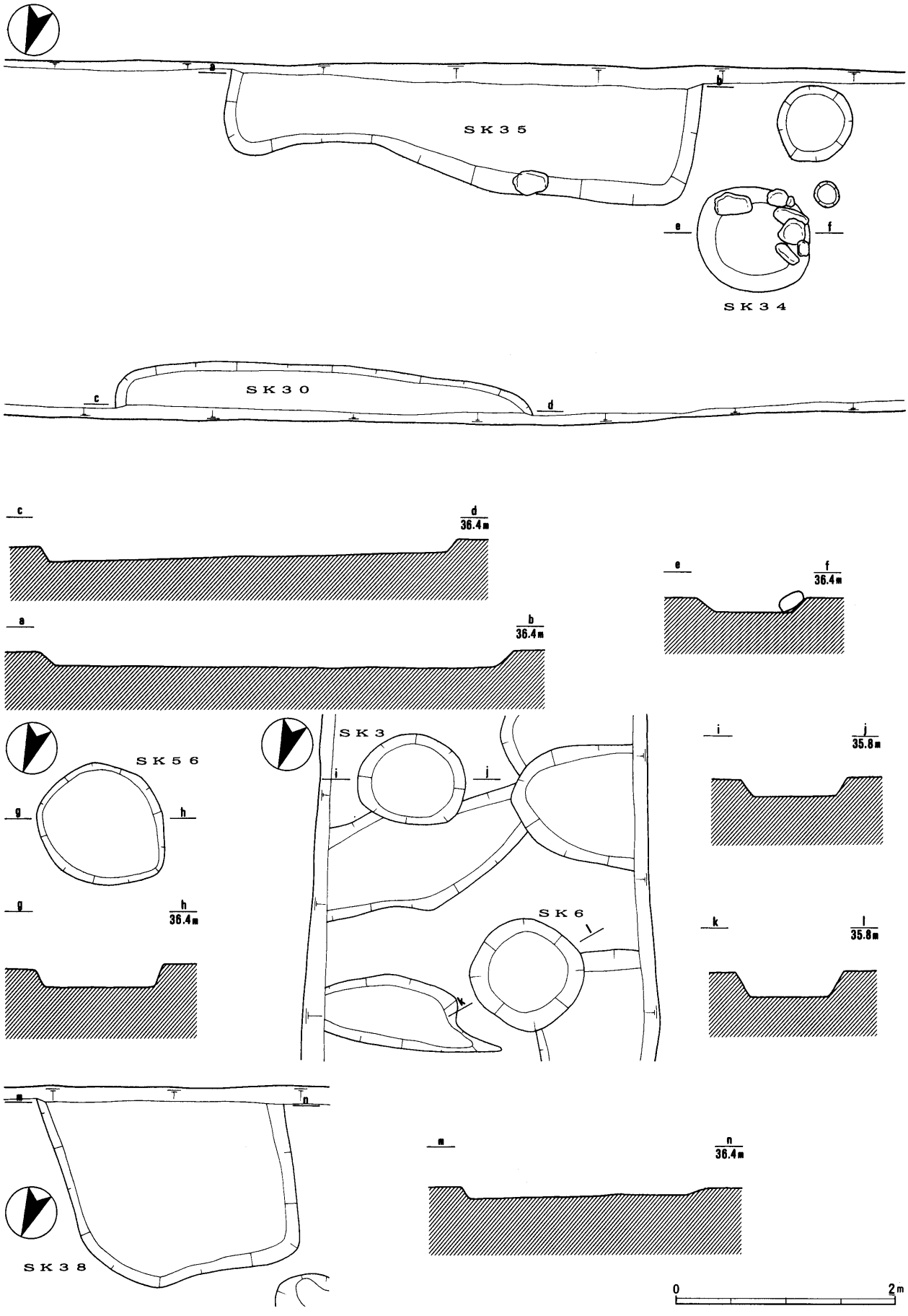
ＳＡ65（第６図）　ａｂ９・10・11に位置する。３間分（約5.4ｍ）を検出した。南北に延び、列方向はＮ６°Ｗである。

ＳＡ66（第６図）　ｂ44・45に位置する。４間分（約7.2ｍ）を検出した。東西に延び、列方向はN65°Ｅである。

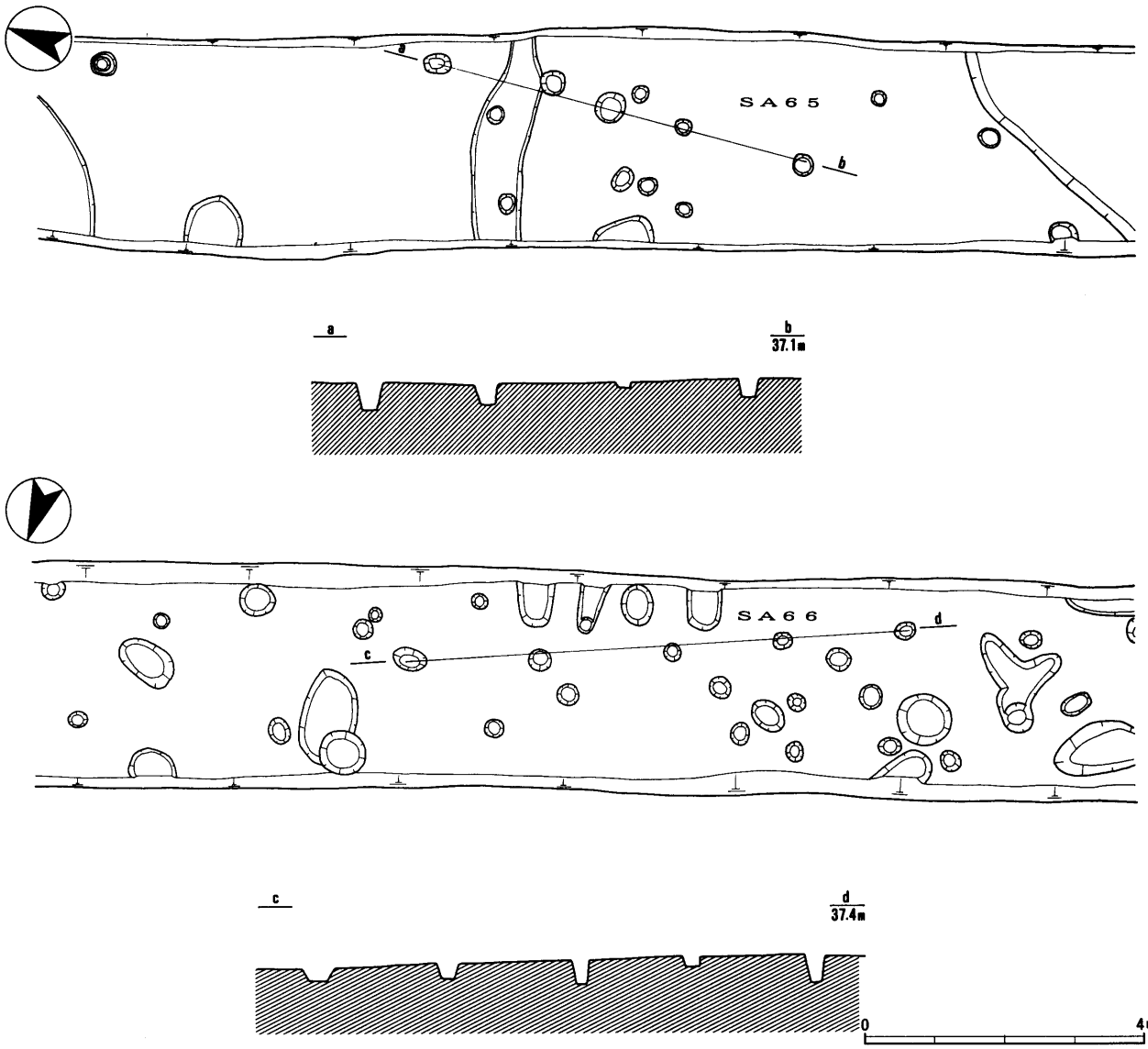
ＳＫ３（第５図）　ａ13に位置する。平面形は楕円形で、長軸約1.0ｍ、短軸約0.8ｍである。深さは約0.2ｍである。

ＳＫ６（第５図）　ｂ13に位置する。平面形は隅丸正方形で、一辺約1.0ｍである。

ＳＫ38（第５図）　ｂ36に位置する。調査区外へ出るため、平面形は不明である。あるいは隅丸方形であろうか。約2.0ｍ×約2.0ｍ以上の規模である。深さは約0.1ｍである。



第5図　SK30・SK34・SK35・SK56・SK3　・SK6　・SK38平面図及び断面図（1：50）



第6図　ＳＡ65・ＳＡ66平面図及び断面図（1：100）

遺構名	小　地　区	規　　模	方　向	根石	時　期	備　　考
ＳＡ65	ａｂ９～11	３間以上	南北列Ｎ６°Ｗ	無	12世紀後半？	
ＳＡ66	ｂ44・45	４間	東西列Ｎ65°Ｅ	無		

第１表　柱列一覧表

遺構名	小　地　区	上面規模（m）	深さ(m)	方　向	時　　期	備　　考
ＳＤ７	ａｂ10	幅0.3～0.9	0.1	N75°Ｅ	縄文時代？	
ＳＤ８	ａｂ12	幅0.5～1.0	0.1	N45°Ｅ		
ＳＤ48	ａｂ38	幅0.6～0.7	0.1	N15°Ｅ		
ＳＤ53	ａｂ50	幅0.9	0.2	N15°Ｅ	中世	
ＳＤ55	ａｂ50	幅0.6～0.7	0.3	N60°Ｗ	縄文時代？	

第２表　溝一覧表

遺構名	小地区	平面形	上面規模（m）	深さ(m)	時　　期	備　　考
ＳＫ１	ｂ３	方形	1.3×0.4	0.2		
ＳＫ３	ａ13	楕円形	1.0×0.8	0.2	中世	

遺構名	小地区	平面形	上面規模（m）	深さ(m)	時期	備考
SK4	b11	楕円形？	0.8	0.3	中世	
SK5	b10		0.8	0.3	中世	
SK6	ab13	隅丸方形	1.0×1.0	0.2	中世	
SK9	b12	楕円形？		0.1		
SK10	b13	楕円形？	1.1	0.2		
SK12	a14	楕円形？	0.6	0.1		
SK13	ab13	不定形		0.1		
SK14	b13	不定形	1.6	0.1		
SK15	a13	不定形	1.0	0.2		
SK16	a18	楕円形	1.0×0.8	0.4	縄文時代	
SK17	a17	隅丸方形	0.8×0.8	0.3	縄文時代	
SK18	ab16	不定形	0.8×2.4以上	0.5	弥生時代？	
SK19	ab17	不定形	1.6×0.8	0.3	縄文時代	
SK20	ab19	不定形	0.9×1.6以上	0.4	縄文時代	
SK21	ab18	不定形	0.4×2.2以上	0.2	縄文時代	
SK22	ab20	楕円形	1.2×1.0	0.2	中世	
SK23	ab24	円形	直径1.4	0.5	中世	
SK24	a24	不定形	1.3	0.4	中世	
SK26	b25	方形	0.6×0.5以上	0.3	中世	
SK27	b25	方形	1.1×0.8	0.2	中世	
SK28	a28	不定形	1.1×1.2以上	0.6	縄文時代	
SK29	a29	楕円形	0.9×0.8	0.1	中世	
SK30	a31		3.8	0.2	縄文時代	
SK31	b32	円形	直径0.7	0.2	中世	
SK33	b34	円形	直径1.2	0.3	中世	
SK34	b32	楕円形	1.1×0.9	0.2	縄文時代	
SK35	b32		4.3	0.2	縄文時代	
SK37	a37	円形	直径0.7	0.4		
SK38	b36	隅丸方形？	2.0×2.0以上	0.1	中世	
SK39	a37		1.1	0.3	縄文時代	
SK40	a37	楕円形？	1.3×1.0以上	0.7	縄文時代	
SK41	b41	楕円形	0.9×0.8	0.2	中世	
SK42	b40	楕円形？	3.0以上	0.1	中世	
SK43	a39	円形	直径0.8	0.3	中世	
SK44	b42		1.6以上	0.3	中世	
SK45	a46	円形	直径0.8	0.2	中世	
SK46	a45	楕円形	0.9×0.6	0.1	中世	
SK49	a45	円形	直径1.1	0.1	中世	
SK50	a48	円形	直径0.9	0.2	縄文時代	
SK51	b48		2.4	0.7	縄文時代	
SK52	b49	不定形	1.1×0.9以上	0.1	縄文時代	
SK54	a50		2.4以上	0.1	縄文時代	
SK56	b51	楕円形	1.2×1.1	0.2	縄文時代	
SK57	a49	楕円形	1.5×1.2	0.1	縄文時代	
SK58	b46		1.0	0.1	縄文時代	
SK59	a46	楕円形	1.5×0.7	0.3	縄文時代	
SK60	b44		0.6×0.6以上	0.2	縄文時代	
SK61	b43	楕円形	0.9×0.5	0.1	縄文時代	
SK62	a43	楕円形	1.4×0.8	0.1		
SK64	b41	楕円形	0.9×0.7	0.1	縄文時代	

第3表　土坑一覧表

4　遺物

出土遺物には縄文土器・石器、若干の弥生土器、中世の土器類がある。整理用コンテナ箱にして30箱である。

(1)　縄文時代の遺物

遺物量は最も多い時代である。包含層出土遺物が多く、出土位置・遺構については観察表を参照されたい。

a　土器（1～44）

深鉢が最も多く、他に鉢や注口土器がある。以下には器種別に記述する。底部は器種にかかわらず、まとめた。

深鉢（1～32）　1～3は、太い沈線と、擬縄文または条線を施すものである。1は、波状口縁の突起部分であろう。突帯上を刺突する。2は、沈線間に条線を施す平口縁である。3は、端部が肥厚する波状口縁である。沈線間に条線を施す。

4～6は、沈線と浮文を併用するものである。4は、平口縁である。沈線間と「ノ」字状浮文上を二枚貝腹縁で刻む。5は平口縁で、「ノ」字状浮文を貼り付ける。沈線間は、縄文ＲＬである。6は、波状口縁で、浮文は「ノ」字ではなく左右均等のものである。

7～10は、刻みと沈線を施すものである。7は、口縁に近い体部片で、密な刻みと連弧状の沈線が認められる。8は平口縁で、屈曲部に刻みが認められる。9は浮文端部で、円形刺突が施される。10は、平口縁である。内外面ともに沈線間に刻みが施される。

11～14は、凹線と刻み、巻貝による扇状圧痕が施されるものである。11は、波状口縁である。凹線と刻み帯が2条認められる。12は平口縁で、刻み帯は3条認められる。13は平口縁で、扇状圧痕上に2個一対の瘤状隆起がある。凹線間を刻み、凹線の末端を刺突する。14は平口縁で、扇状圧痕と凹線間の刻みが施される。

15～20は、凹線と、扇状圧痕が施されるものである。15は、平口縁で、3条の凹線と、扇状圧痕が施される。末端刺突が認められる。16は平口縁で、扇状圧痕上方に瘤状隆起がある。17は、平口縁で、3条の凹線と、扇状圧痕が施される。屈曲部以下は、貝殻調整である。18は、波状口縁である。2段の扇状圧痕が施され、瘤状隆起が施される。19は、2段の扇状圧痕が施され、末端刺突が認められる。20は、口縁屈曲部片であるが、内外面に赤色顔料が付着している。おそらく朱であろう。

21～26は、凹線のみが施されるものである。凹線は3～5条認められる。21・22・24・25は、屈曲部を持つ平口縁、23・26は、直口の平口縁である。22は、屈曲部から上の外反が強く、鉢である可能性もある。24の内面に、朱と思われる赤色顔料が認められる。

27・28は、口唇内面に刻みを施すものである。いずれも直口の平口縁で、27は二枚貝腹縁、28はヘラ状工具による刻みである。

29～32は、無文である。29は、屈曲部を持つ平口縁、30は、浮文を貼り付ける平口縁、31は、直口の平口縁、32は波状口縁である。いずれも貝殻調整が施される。

鉢（33・34）　33は、屈曲部直上に凹線が2条認められ、口唇直下にも1条認められる。34は、ボウル状になる器形で、無文である。貝殻調整の後にミガキを施す。

注口土器（35・36・37・38）　35は、胴部上半に段をもつものであろう。沈線間に二枚貝腹縁による刻みが施され、他は磨く。36は、胴部上半に段をもたない。口縁部の刻み帯と、胴部屈曲部の刻み帯の間にクランク状モチーフの沈線を描き、地文に縄文ＬＲを施す。37・38は、注口部である。37は、下部に凹線を施し、末端刺突をおこなう。

高杯（39）　39は、高杯の脚部であろう。無文である。

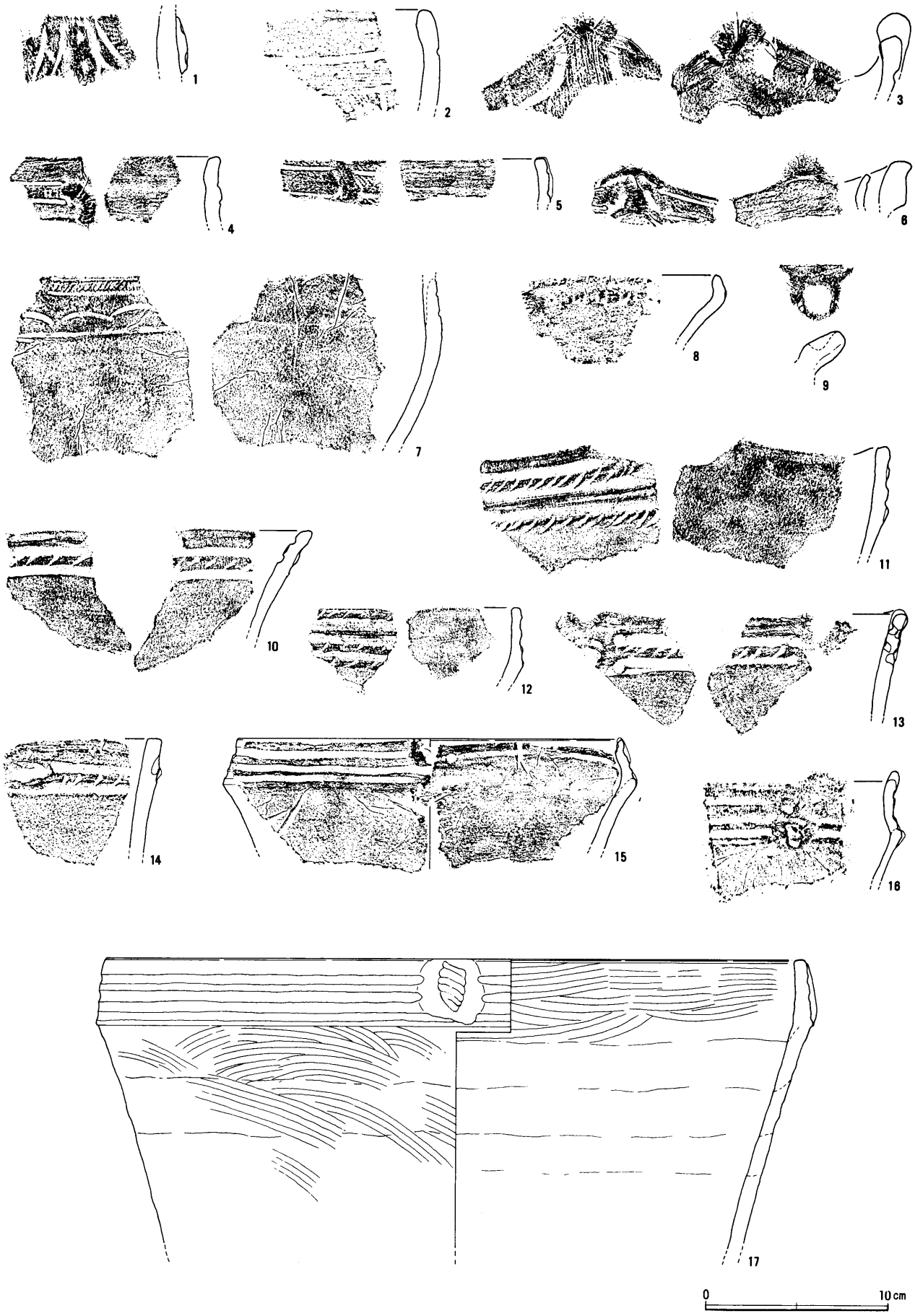
底部（40～44）　全て凹底で、平底のものなどは無かった。

以上の土器は、1が中期末の、2・3が後期初頭のものと思われ、その他は後期後葉を中心とする時期のものと思われる。土器型式では、一乗寺Ｋ式～元住吉山Ⅰ・Ⅱ式～宮滝式古相に比定できる。

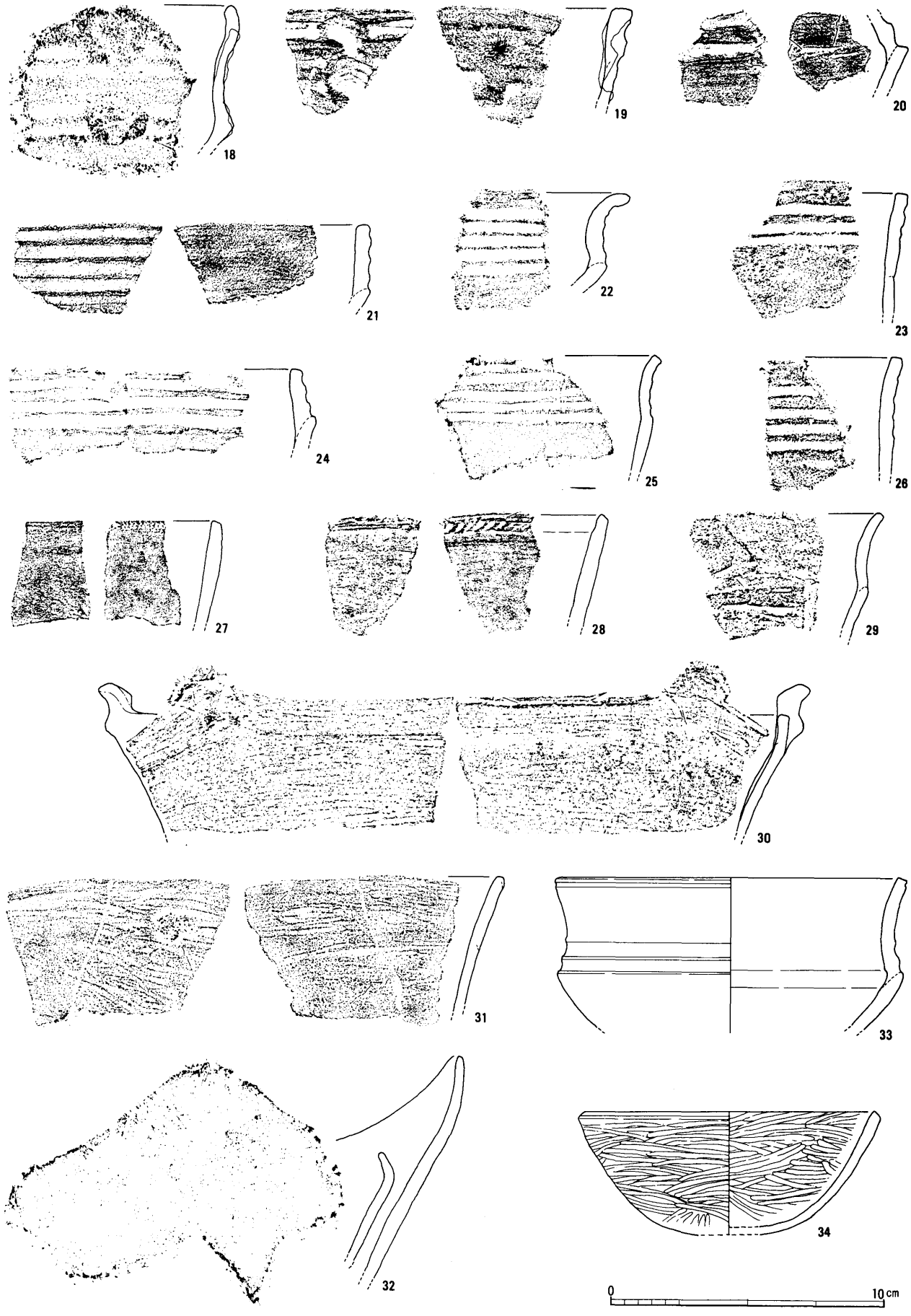
b　石器（66～98）

石鏃の出土が最も多く、23点である。ここでは、いくつかを記述する。その他は全て取り上げた。

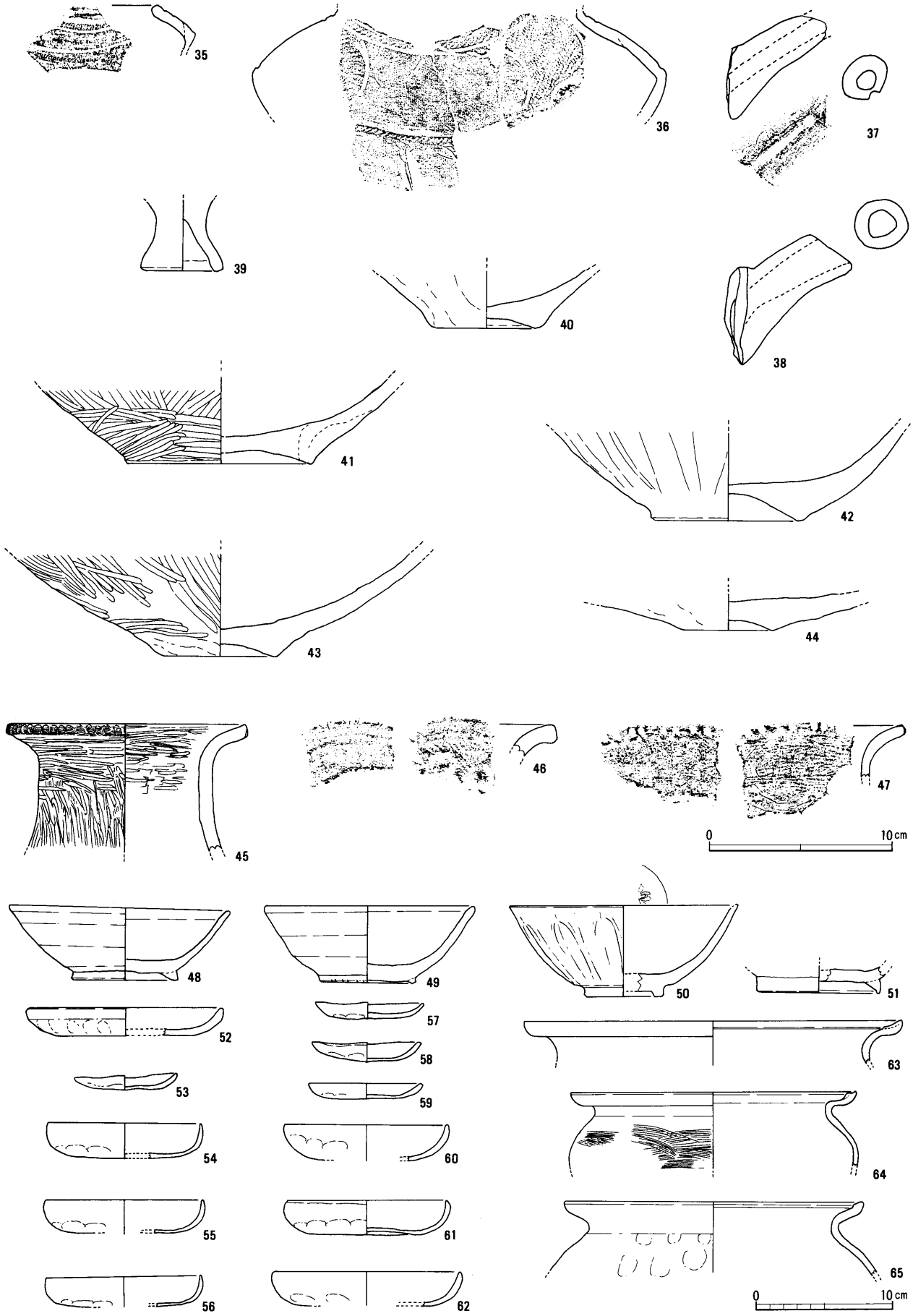
石鏃（66～76）　66～69・72は、基部が凹基をなし、



第７図　縄文土器実測図（１）（1：２）



第８図　縄文土器実測図（２）（1：２）



第9図　縄文土器・弥生～中世の遺物　35～44は（1：2）、45～65は（1：4）

側縁が直線的で、平面形が正三角形または二等辺三角形になるものである。66は、長幅比が1.0で正三角形の平面形をもつ。67・68は、脚端部が丸い。68は先端を欠く。69は、先端と左側縁を欠く。72は先端を欠く。全てサヌカイト製である。

70は、基部が凹基をなし、側縁が緩やかに外に張り出すものである。基部の抉りは深い。サヌカイト製である。

71は、基部が凹基をなし、側縁が内弯するものである。やや甲高である。サヌカイト製である。

73・74は、基部が凹基をなし、側縁は内弯するが脚部で緩く外に張り出してから脚端部で内にすぼまるものである。73は、右側縁と脚部を欠く。74の側縁は、やや鋸歯状になる。ともにサヌカイト製である。

75は、基部が平基をなし、側縁が直線的なものである。腹面に素材面を残す。先端を欠く。サヌカイト製である。

76は、基部が尖基をなし、側縁が直線的なものである。先端を欠く。サヌカイト製である。

石錐（77・78）　77は、明確なつまみ部をもたず、棒状の機能部をもつ。自然面をもつ素材の、背面は両側縁に、腹面は一側縁に調整をおこなう。78は、明確なつまみ部をもたず、機能部が寸詰まりのものである。背面は、縁辺のみの加工がほぼ全周する。腹面は、基部と一側縁に縁辺のみの加工がおこなわれる。ともにサヌカイト製である。

削器（79・80）　79は、自然面をもつ縦長の剥片を素材にし、背面は右側縁に、腹面は左側縁と右側縁の打点近くに調整をおこなう。80は、自然面をもつ剥片を素材にし、一側縁のみに背腹両面からの剥離を施す。

打欠き石錘（81～84）　81・83は、両端両面を打欠く。ともに砂岩製である。82・84は、一端の両面を打欠き、もう一端は片面を打欠く。82は結晶片岩、84は凝灰岩製である。

打製石斧（85）　85は、細長い結晶片岩礫を素材とし、一端を加工する。

台石（86）　86は、両面に敲打痕をもつ。重さの感覚で本器種としたが、敲石としてもよいだろう。

石皿（87・88）　87は小型品で、片面に機能面をもつ。88も片面が機能面である。

敲石（89～93）　89は、両面に凹部をもち、側面にも敲打痕が認められる。90は、片面が機能面であるが、凹部は明瞭でない。91は、両面に明瞭な凹部をもち、側面にも敲打痕が認められる。92・93は、両面に敲打痕が認められる。93は、明瞭な凹部となっている。

磨石（94～98）　94・95は、細長い礫の一端を機能面としている。96～98は、円礫である。96は、磨痕がやや弱い。97は、片面に、98は全面に機能面をもつ。

(2)　弥生時代の土器（45～47）

45は、広口壺である。内外面を磨き、口縁端部を刻む。46は、広口壺であろう。口縁端部内面に、二枚貝腹縁による刺突が2段認められる。47は、甕であろう。外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメが認められる。口縁端部を刻む。

45は、中期前半のもので、他も中期のものであろう。

(3)　中世の土器（48～65）

土師器皿（52～62）　52は、器壁が厚く、体部下半はオサエ。53・57～59は、口径8㎝内外で、端部がわずかに立ち上がる。54～56は、口径11㎝内外で、60・61は、口径12㎝内外である。62は、口径約14㎝である。

52は、12～13世紀代、他は14～15世紀代のものであろう。

土師器椀（51）　51は、ロクロ成形され、底部に糸切り痕が残る。

土師器鍋（63～65）　63は、口縁部の折り返しを低くする。64は、折り返し上に稜をもつ。65は、小さく折り返す。

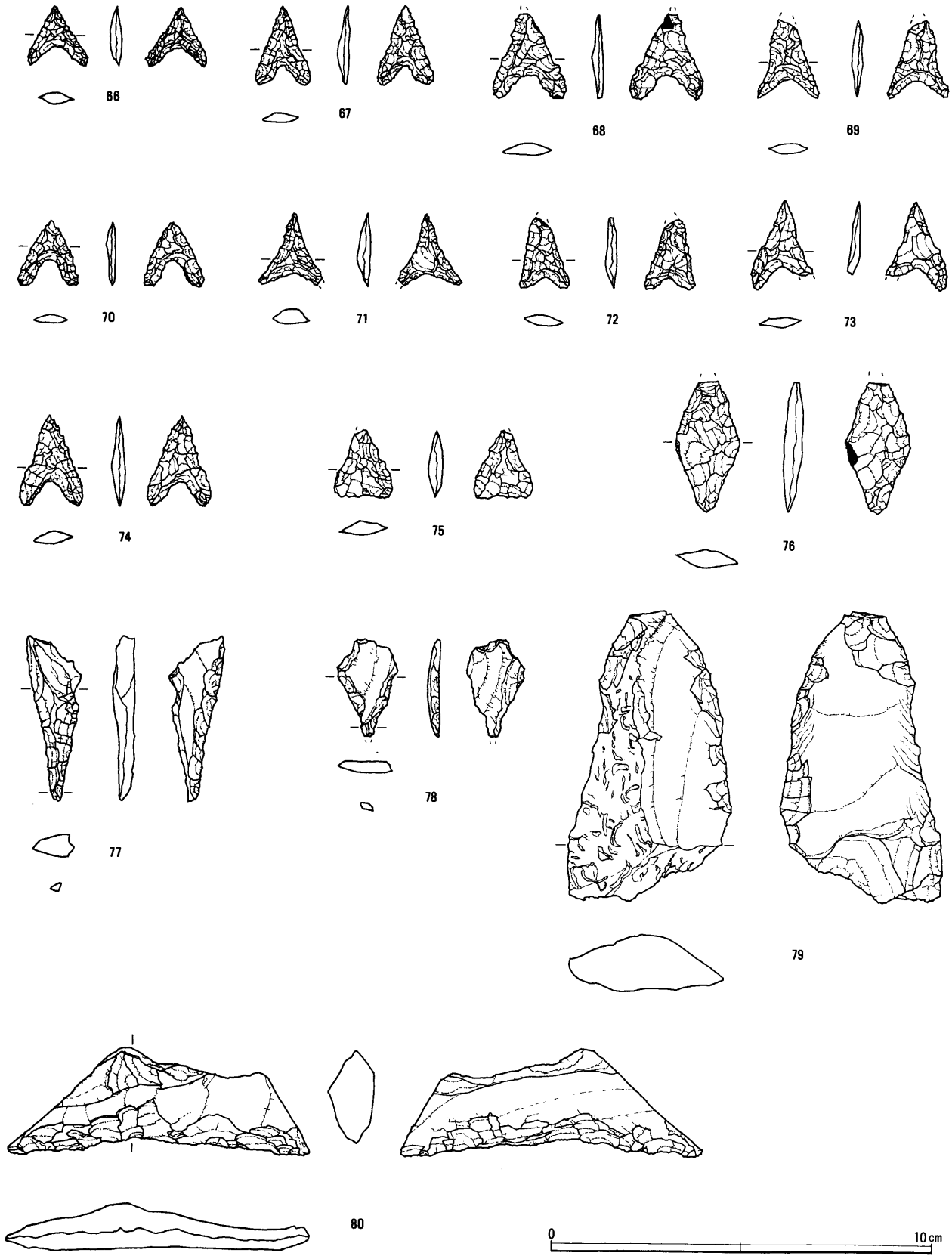
65は、伊藤編年の（仮）A段階、63は第1段階、64は第2段階に相当するものであろう。12世紀中葉から14世紀中葉をあてることができる。

山茶椀（48・49）　ともに渥美産であろう。48は、やや歪みがある。口縁端部は、やや外反する。内面に自然釉が掛かり、内面底には重ね焼きによる高台痕が残る。49は、体部下半がやや丸みを帯び、口縁端部で若干外反する。

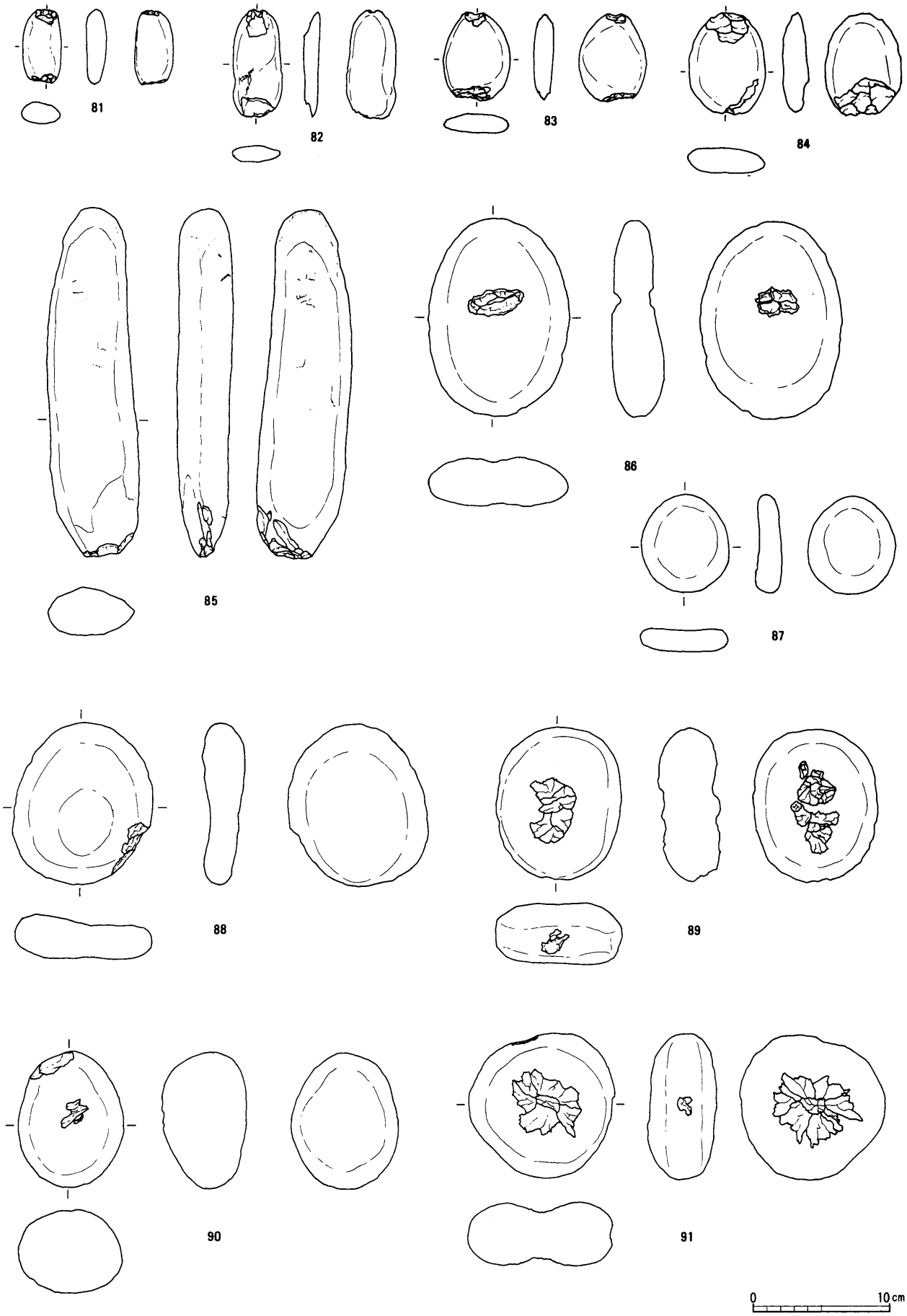
48は、渥美型第2型式（尾張型第5型式並行）、49

は、渥美型第３型式（尾張型第６型式並行）に相当するものと考えられ、13世紀前半であろう。

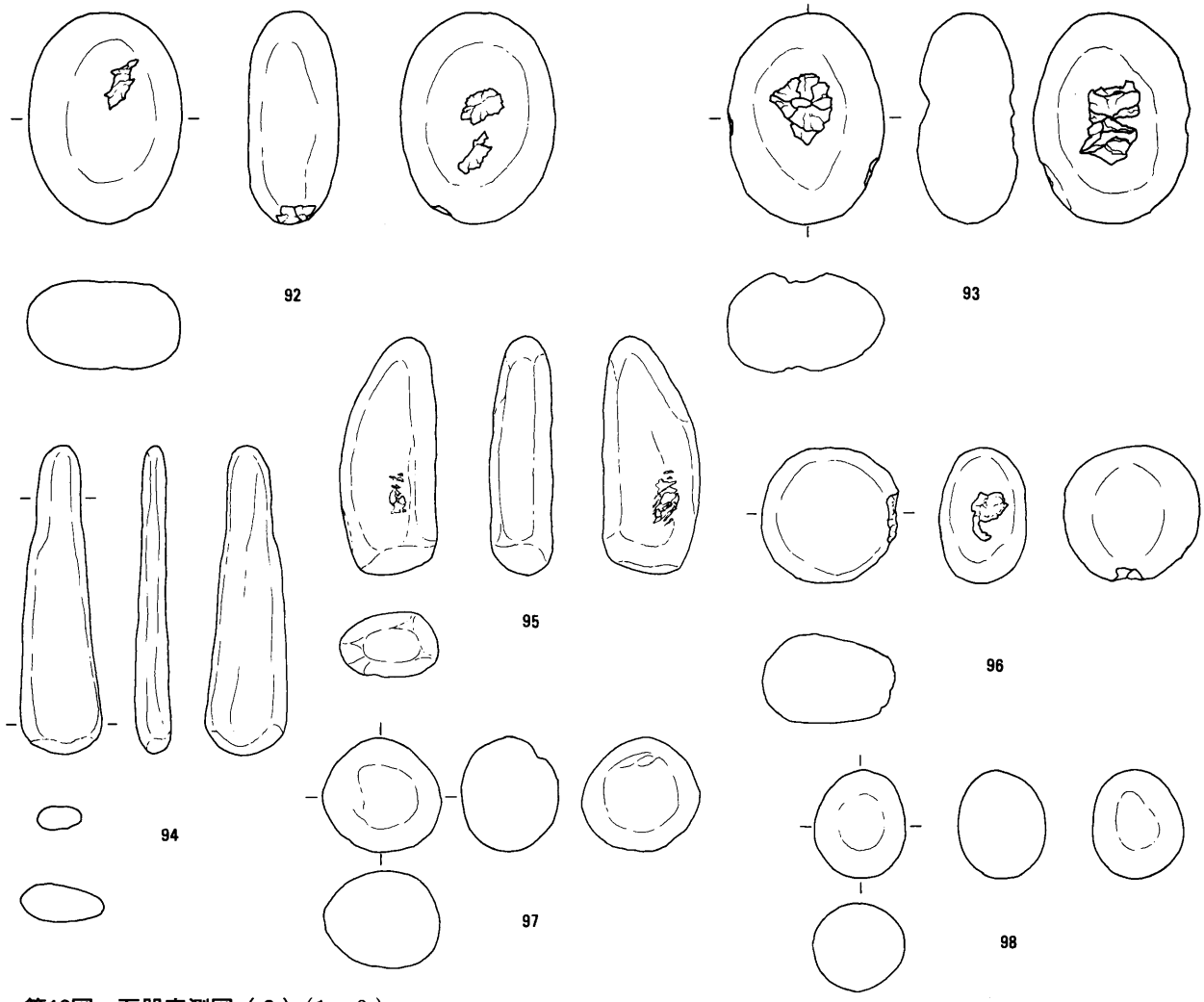
青磁碗（50）　外面に陰刻蓮弁文、内面底には陰刻花文が認められる。



第10図　石器実測図（１）（２：３）



第11図　石器実測図（２）（1：２）



第12図　石器実測図（３）（1：２）

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	法量（cm）	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考
1	007-05	縄文土器 深鉢	b48 検出		外面擬縄文、沈線のち隆帯貼り付け。隆帯上を刺突。内面ミガキか。	粗	並	10YR6/3にぶい黄橙	口縁小片	
2	012-07	縄文土器 深鉢	b32 P1		外面沈線。沈線間を条線。内面ナデ。	粗	並	7.5YR7/6橙 10YR6/4にぶい黄橙	口縁小片	
3	007-01	縄文土器 深鉢	排土		外面沈線。沈線間を条線。内面ナデ。	粗	並	10YR8/2灰白	口縁小片	
4	008-05	縄文土器 深鉢	a25		外面「ノ」字状浮文のち沈線。浮文上と沈線間を二枚貝腹縁による刻み。内面ナデ。	やや粗	並	10YR8/3浅黄橙 7.5YR5/2灰褐	口縁小片	
5	008-04	縄文土器 深鉢	a33 検出		外面「ノ」字状浮文。縄文ＲＬのち沈線。内面ナデ。	粗	並	5YR7/3にぶい橙 7.5YR4/2灰褐	口縁小片	
6	008-03	縄文土器 深鉢	a21 検出		外面浮文。沈線。内面ミガキ。	やや粗	並	7.5YR4/2灰褐 7.5YR6/3にぶい褐	口縁小片	
7	007-03	縄文土器 深鉢	b39 検出		外面刻み。沈線間に連弧文のちミガキ。内面ナデ。	粗	並	7.5YR6/1褐灰	体部片	
8	013-08	縄文土器 深鉢	包含層		外面口縁屈曲部に刻み。内面ナデ。	粗	並	7.5YR6/6橙 10YR7/4にぶい黄橙	口縁小片	
9	008-07	縄文土器	a24		ナデ、ミガキ。円形刺突。	やや粗	並	10YR8/3浅黄橙 10YR4/1褐灰	浮文部	
10	007-04	縄文土器 深鉢	a25		内外面ともに沈線間に刻み。ミガキ。	粗	並	7.5YR4/1褐灰 7.5YR5/2灰褐	口縁小片	

第４表　土器観察表（１）

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	法量（cm）	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考
11	007-02	縄文土器 深鉢	包含層		外面凹線と刻み。ミガキ。内面ナデ。	粗	並	7.5YR5/2灰褐 10YR7/3にぶい黄橙	口縁小片	
12	007-07	縄文土器 深鉢	b19 検出		外面凹線と刻み。ミガキ。内面ミガキ。	やや粗	並	10YR7/2にぶい黄橙	口縁小片	
13	013-04	縄文土器 深鉢	b31 検出		内外面ともに凹線間に刻み。ミガキ。凹線末端刺突。口縁端部2個一対の瘤状突起下に扇状圧痕。	やや粗	並	10YR4/1褐灰 10YR4/2黄褐灰	口縁小片	
14	012-08	縄文土器	b53 P2		外面凹線間に刻み。扇状圧痕。ミガキ。内面ミガキ。	やや粗	並	7.5YR4/2灰褐 10YR6/3にぶい黄橙	口縁小片	
15	006-01	縄文土器 深鉢	排土	口径(21.0)	外面凹線、扇状圧痕。ミガキ。内面口縁端部下に凹線、末端刺突。	粗	並	10YR6/2灰黄褐 10YR4/1褐灰	口縁1/8	
16	005-04	縄文土器 深鉢	SK18		外面凹線、扇状圧痕。ミガキ。口縁端部に瘤状突起。内面ミガキ。	やや粗	並	2.5Y4/1黄灰	口縁小片	
17	010-01	縄文土器 深鉢	a24	口径(38.0)	外面凹線、扇状圧痕。条痕。内面条痕。	やや粗	良	10YR6/2灰黄褐 10YR7/2にぶい黄橙	口縁1/4	43と同一個体の可能性が高い。
18	005-02	縄文土器 深鉢	包含層		外面凹線。口縁端部2個一対の瘤状突起下に扇状圧痕。内面ナデ。	粗	並	10YR8/3浅黄橙 10YR7/4にぶい黄橙	口縁小片	
19	008-02	縄文土器 深鉢	包含層		外面凹線、扇状圧痕。凹線は末端刺突。内面ナデ。	粗	並	7.5YR4/1褐灰 10YR7/1灰白	口縁小片	
20	008-06	縄文土器 深鉢	包含層		外面凹線、扇状圧痕。内外面ミガキ。	粗	並	10YR6/3にぶい黄橙 10YR5/2灰黄褐	体部小片	内外面に朱と思われる赤色顔料付着。
21	006-02	縄文土器 深鉢	SK40		外面凹線。内面条痕。	粗	並	10YR8/3浅黄橙	口縁小片	
22	012-04	縄文土器 深鉢	a27 P2		外面凹線。内面ナデ。	やや粗	並	10YR7/3にぶい黄橙 2.5Y8/3淡黄	口縁小片	
23	012-02	縄文土器 深鉢	SK51		外面凹線。内面ナデ。	やや粗	並	10YR3/2黒褐 10YR2/1黒	口縁小片	
24	012-01	縄文土器 深鉢	SK42		外面凹線。内面ナデ。	やや粗	並	10YR7/2にぶい黄橙 10YR7/3にぶい黄橙	口縁小片	内面に朱と思われる赤色顔料付着。
25	005-03	縄文土器 深鉢	SD55		外面凹線。内外面ミガキか。	粗	並	10YR6/3にぶい黄橙	口縁小片	
26	012-03	縄文土器 深鉢	SK24		外面凹線。内面ナデ。	やや粗	並	10YR6/3にぶい黄橙 7.5YR7/6橙	口縁小片	
27	006-04	縄文土器 深鉢	a20 検出		外面ミガキか。内面口縁端部下に二枚貝腹縁による刻み。ミガキ。	やや粗	並	10YR7/2にぶい黄橙 10YR3/1黒褐	口縁小片	
28	012-06	縄文土器 深鉢	a40 P1		内外面ミガキか。内面口縁端部下に刻み。	粗	並	7.5YR7/4にぶい橙 10YR3/1黒褐	口縁小片	
29	012-05	縄文土器 深鉢	a48 P1		内外面とも貝殻調整のちミガキ。	粗	並	10YR7/4にぶい黄橙 7.5YR7/3にぶい褐	口縁小片	
30	011-02	縄文土器 深鉢	b38	口径(38.5)	内外面とも貝殻条痕。	やや粗	並	7.5YR4/1褐灰	口縁1/5	
31	008-01	縄文土器 深鉢	SK40		内外面ともに貝殻調整のちミガキ。	粗	並	5YR5/2灰褐	口縁部	
32	005-01	縄文土器 深鉢	SK42		内外面ナデ？	粗	並	2.5Y8/3淡黄	口縁部	器面磨滅。
33	006-05	縄文土器 鉢	a21 検出	口径(19.0)	外面凹線、貝殻条痕。内面貝殻条痕。	粗	並	10YR8/3浅黄橙 7.5YR5/2灰褐	屈曲部 1/4	
34	009-05	縄文土器 鉢	b38	口径(16.0) 器高(6.7)	内外面ともに貝殻調整のちミガキ。	粗	良	10YR8/3浅黄橙 10YR6/3にぶい黄橙	1/2	
35	013-07	縄文土器 注口土器	b38		外面沈線、二枚貝腹縁による刻み。ミガキ。内面ミガキ。	やや粗	並	10YR4/2灰黄褐 10YR6/2灰黄褐	口縁小片	
36	027-02	縄文土器 注口土器	b39 包含層	屈曲部径(22.8)	外面刻み、沈線、縄文LR、ミガキ。内面ミガキ。	やや粗	並	10YR7/1灰白 10YR6/1褐灰	体部	
37	013-02	縄文土器 注口土器	b47 検出		ミガキ。下部凹線、末端刺突。	やや粗	並	10YR4/2灰黄褐 10YR3/1黒褐	注口部	
38	013-03	縄文土器 注口土器	b38		ナデ。	やや粗	並	10YR6/3にぶい黄橙	注口部	

第4表　土器観察表（2）

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考
39	013-01	縄文土器 高杯	b16	底径(4.4)	内外面ナデか。	粗	並	10YR7/3にぶい黄橙	脚部	
40	009-01	縄文土器	SK16	底径(5.5)	内外面ナデ。	粗	良	5Y8/2灰白 2.5Y8/3淡黄	底部	
41	009-03	縄文土器	SK51	底径(10.0)	外面貝殻調整のちミガキ。内面ナデ。	粗	良	10YR7/3にぶい黄橙 2.5Y7/2灰黄	底部1/3	
42	009-04	縄文土器	SK56	底径(8.0)	内外面ナデ。	粗	良	2.5YR7/4淡赤橙 2.5Y8/3淡黄	底部	
43	010-01	縄文土器	a24	底径(8.0)	外面貝殻調整のちミガキ。内面ナデ。	やや粗	良	10YR6/2灰黄褐	底部	17と同一個体の可能性が大きい。
44	009-02	縄文土器	包含層	底径(4.9)	内外面ナデ。	粗	良	7.5YR7/6橙 2.5Y5/2暗灰黄	底部	
45	027-01	弥生土器 広口壺	SK25	口径(12.7)	外面ハケのちミガキ。口縁端部刻み。内面ミガキ、ナデ。	粗	並	10YR7/3にぶい黄橙	口縁2/3	
46	013-06	弥生土器 広口壺	SK18		外面ナデ。内面二枚貝腹縁による刺突。	やや粗	並	10YR7/4にぶい黄橙	口縁小片	
47	013-05	弥生土器 甕	SK25		内外面ハケ。口縁端部刻み。	やや粗	並	5YR5/3にぶい赤褐 5YR6/6橙	口縁小片	
48	004-01	山茶椀	b10 P2	口径16.2 器高5.4	内外面ロクロナデ。貼り付け高台。	やや粗	並	2.5Y8/1灰白	ほぼ完形	
49	004-02	山茶椀	b10 P1	口径15.5 器高5.6	内外面ロクロナデ。貼り付け高台。	やや密	並	2.5Y7/2灰黄	ほぼ完形	
50	001-04	青磁碗	SK23	口径(16.8) 器高(6.7)	内外面施釉。	密	良	7.5Y7/1灰白 釉)10Y5/2オリーブ灰	1/6	
51	004-04	土師器椀	a10 P2	高台径(9.0)	内外面ロクロナデ。貼り付け高台。	やや粗	並	7.5YR7/4にぶい橙	底部小片	
52	004-03	土師器皿	b44 P1	口径(16.0) 器高(2.0)	外面オサエ、ナデ。口縁部ヨコナデ。内面ナデ。	やや粗	並	7.5YR8/4浅黄橙	口縁1/8	
53	003-06	土師器皿	SK23	口径(7.5)	外面オサエ。内面ナデ。	やや密	並	2.5Y8/3淡黄	一部欠	
54	002-02	土師器皿	SK23	口径(11.2)	外面オサエ、ナデ。内面ナデ。	やや粗	並	10YR8/2灰白	1/3	
55	002-06	土師器皿	SK23	口径(11.4)	外面オサエ、ナデ。内面ナデ。	やや密	並	10YR8/2灰白	1/3	
56	002-05	土師器皿	SK23	口径(11.4)	外面オサエ、ナデ。内面ナデ。	やや粗	並	10YR8/2灰白	1/3	
57	003-05	土師器皿	SK24	口径(7.8)	外面オサエ。内面ナデ。	やや粗	並	2.5Y8/3淡黄	一部欠	
58	003-03	土師器皿	SK24	口径(8.0)	外面オサエ。内面ナデ。	やや粗	並	10YR8/3浅黄橙	一部欠	
59	003-04	土師器皿	SK24	口径(8.3)	外面オサエ。内面ナデ。	やや密	並	2.5Y8/3淡黄	ほぼ完形	
60	002-04	土師器皿	SK24	口径(11.8)	外面オサエ、ナデ。内面ナデ。	やや粗	並	2.5Y8/2灰白	1/3	
61	003-01	土師器皿	SK24	口径(11.8)	外面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。	やや密	並	7.5YR8/3浅黄橙	一部欠	
62	002-03	土師器皿	SK24	口径(13.6)	外面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。	やや粗	並	2.5Y8/3淡黄	1/3	
63	001-03	土師器鍋	SK23	口径(23.8)	外面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。	やや粗	並	10YR6/2灰黄褐 10YR7/3にぶい黄橙	口縁1/8	
64	001-01	土師器鍋	SK24	口径(21.0)	外面ハケ、ナデ。口縁部横ナデ。内面工具ナデ。	やや粗	並	2.5Y8/3浅黄 2.5Y8/4浅黄	口縁1/8	
65	001-02	土師器鍋	SK44	口径(22.0)	外面オサエ、ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。	やや粗	並	2.5Y7/2灰黄 2.5Y8/3淡黄	口縁1/8	

第4表　土器観察表（3）

報告書番号	登録番号	器種	出土位置遺構	石材	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
66	028-02	石鏃	b24P2	サヌカイト	完形	1.6	1.6	0.3	0.44	
67	028-03	石鏃	b39	サヌカイト	完形	2.1	1.4	0.3	0.60	
68	029-01	石鏃	b18P3	サヌカイト	先端部欠	(2.2)	1.9	0.3	0.86	
69	029-03	石鏃	b39	サヌカイト	先端部欠	(2.0)	1.6	0.3	0.70	
70	027-04	石鏃	ＳＫ20	サヌカイト	完形	1.7	1.6	0.2	0.41	
71	027-01	石鏃	a24	サヌカイト	脚部一方欠	1.9	(1.7)	0.4	0.71	
72	029-02	石鏃	a20P3	サヌカイト	先端部欠	(1.8)	1.3	0.3	0.60	
73	028-04	石鏃	a21	サヌカイト	脚部一方欠	2.3	(1.6)	0.3	0.59	
74	027-03	石鏃	ＳＫ20	サヌカイト	完形	2.4	1.7	0.4	0.89	
75	028-01	石鏃	b47	サヌカイト	先端部欠	(1.7)	1.6	0.4	0.85	
76	027-02	石鏃	表採	サヌカイト	先端部欠	(3.4)	1.7	0.5	2.72	
77	030-02	石錐	ＳＫ20	サヌカイト	ほぼ完形	4.3	1.5	0.6	2.86	
78	030-01	石錐	ab25	サヌカイト	先端部欠	(2.5)	1.6	0.3	1.44	
79	032-01	削器	a37	サヌカイト	完形	7.6	4.3	1.5	35.68	
80	031-01	削器	ＳＫ20	サヌカイト	完形	(2.8)	7.9	1.2	20.68	
81	014-02	打欠き石錘	a40	砂岩	完形	5.3	2.8	1.6	32.22	
82	014-03	打欠き石錘	排土	長石石英片岩	ほぼ完形	7.8	3.6	1.2	52.28	
83	016-02	打欠き石錘	排土	砂岩	完形	6.4	4.8	1.4	63.40	
84	015-02	打欠き石錘	排土	流紋岩質溶結凝灰岩	ほぼ完形	7.4	5.6	1.8	103.52	
85	022-01	石斧	b48	絹雲母長石石英片岩	完形	30.7	6.4	3.6	945	
86	015-01	台石	b47	流紋岩質溶結凝灰岩	完形	14.4	10.3	3.9	777	
87	025-02	石皿	b32	流紋岩質溶結凝灰岩	完形	7.1	6.4	1.7	118	
88	016-01	石皿	a25	流紋岩質溶結凝灰岩	ほぼ完形	11.8	10.2	3.3	519	
89	014-01	敲石	排土	流紋岩質溶結凝灰岩	完形	11.3	9.1	4.6	680	
90	018-02	敲石	a46	流紋岩質溶結凝灰岩	完形	9.9	7.7	6.1	608	
91	023-01	敲石	包含層	流紋岩質溶結凝灰岩	完形	10.5	10.7	4.7	812	
92	019-01	敲石	排土	砂岩	完形	11.6	8.3	5.0	726	
93	025-01	敲石	包含層	流紋岩質溶結凝灰岩	ほぼ完形	11.6	8.6	5.4	725	
94	018-01	磨石	b32P1	絹雲母長石石英片岩	完形	16.9	4.5	2.1	182	
95	026-01	磨石	ＳＫ42	流紋岩質溶結凝灰岩	完形	13.0	5.3	3.6	361	
96	021-01	磨石	排土	流紋岩質溶結凝灰岩	ほぼ完形	7.4	7.5	4.9	350	
97	026-02	磨石	包含層	流紋岩質溶結凝灰岩	完形	6.3	6.5	5.4	276	
98	021-02	磨石	b27P2	細粒砂岩	完形	6.0	5.1	4.3	192	

第５表　石器観察表

＜遺構一覧表凡例＞

遺構名：表示記号は「例言」に示した。
上面規模・深さ：数値で表したものは10cm単位である。
方向：特にＳＤについては、おおよその中心線で測っている。

＜遺物観察表凡例＞

報告書番号：図版に対応する番号である。
登録No.：実測図作成番号である。
器種：陶器・土師器などの区別と、見た目の器種を表記した。
法量：わかる法量を表記した。カッコ内は推定値である。
成形・技法の特徴：おおよそを表記した。
胎土：密・やや密・やや粗・粗の４段階で表記した。
焼成：良・並・不良の３段階で表記した
色調：『新版　標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編　９版　1989）を基準にしている。
残存状況：数値は分数で、数値で表せないものは「小片」とした。石器は言葉で表した。

Ⅳ　結　　語

発掘調査の成果は、縄文時代の遺物が最も多く、　　ここでは、縄文時代後期後半に限って記述する。

1　奥ホリ遺跡の性格

本遺跡では、後期後半の土器が大多数を占める。土器型式で言えば、一乗寺K式から宮滝式に比定される資料である。これら凹線文系土器を出土する県内の遺跡は少ない。本遺跡を含めて14か所である。この時期の遺跡分布の様相については、大河川流域に2、3か所の大規模な遺跡が存在するという特徴が奥義次氏によって指摘されている[12]。本遺跡の今回の調査は、水路設置部分のトレンチ調査で、600㎡に限られたものであったにもかかわらず、比較的多くの当該期の土器が出土している。住居跡などの遺構は確認し難かったが、面積に対する遺物量を勘案すれば、大規模な拠点集落である可能性があろう。櫛田川流域の当該期の大規模遺跡には、上流から、飯高町・宮ノ東遺跡と勢和村・新神馬場遺跡が知られており、本遺跡で3か所目となる。宮ノ東から新神馬場は、約20km下り、新神馬場から奥ホリは、約6km下る位置関係である。特に新神馬場遺跡は、一乗寺K式から始まり、宮滝式古相で断絶しており、本遺跡の存続時期とほぼ同じである。本遺跡とは、隣接集落としてほぼ同時併存していたと思われる。山田猛氏は、早期押型文の時期における櫛田川流域の遺跡群を、領域概念を用いて検討している[13]。その中で、単位集団の日常的な生活範囲として「単位領域」の具体的な設定をしており、単位領域間を5～6km程度としている。これを後期後半の凹線文系土器の時期に用いれば、本遺跡と新神馬場遺跡は、この「単位領域」を互いに保つ関係にあると言えるだろう。ただ、従来からの指摘のとおり、この時期の遺跡数は極めて少なく、遺跡群を形成するものではない。このような、この時期の集落のありかた、食料獲得・生産方法の解明とともに、資料の蓄積が待たれる。

2　赤色顔料について

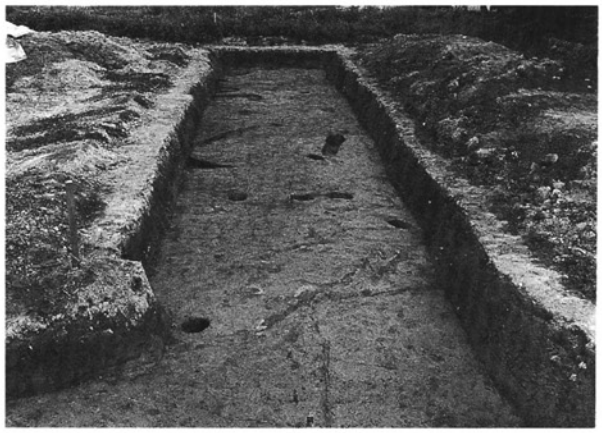
土器には、図示したものを含めて数点に赤色顔料の付着が認められた。出土遺物中の敲石、磨石、石皿には付着は認められなかった。しかし、表面採集資料には赤色顔料付着の敲石があるということである[14]。出土土器の赤色顔料は、分析をおこなっていないが、その発色からは朱であると思われる。奥義次氏は、後期後半の県内の遺跡が朱を媒介とする交易をおこなっていたのではないか、と指摘している[15]。森川幸雄氏も、この朱の生産と流通を、一定規模の集団を必要とした、つまり拠点的な集落形成の一つの根拠として挙げている[16]。本遺跡が拠点的な集落であるとすれば、朱の流通あるいは生産に関わっていた可能性もあるだろう。

中央構造線上に流域をもつ、西の紀ノ川水系と東の櫛田川水系は、東西を結ぶ文化の伝播ルートである。奥ホリ遺跡は、まさにこのルート上にあり、縄文時代後期後半の凹線文系土器期の、西から東への文化の伝播、あるいは一地域での拡散を考える上での重要な遺跡である。

［註・参考文献］

① 奥義次「大原堀遺跡」(『松阪市史　第二巻　史料編　考古』、松阪市史編さん委員会、1978年)。
② 田村陽一ほか「上ノ広遺跡」[『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊1、三重県教育委員会、1989年]。
③ 田村陽一「花ノ木遺跡」以下②に同じ。
④ 松葉和也『縁通庵遺跡・アカリ遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、1999年)。
⑤ 田村陽一「浅間山南遺跡」以下②に同じ。
⑥ 奥義次「王子広遺跡」以下①に同じ。
⑦ 岩田直衛ほか『新神馬場遺跡発掘調査報告書』(三重県立津高等学校地歴部、1972年)。
⑧ 奥義次「付Ⅱ池ノ谷遺跡範囲確認調査報告」(『勢和村遺跡地図』、勢和村教育委員会、1995年)。
⑨ ③参照。
⑩ 田村陽一「釈尊寺遺跡」以下②に同じ。
⑪ 野原宏司「鍬形中世墓群」[『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊2、三重県教育委員会、1989年]。
⑫ 奥義次「縄文時代」(『多気町史』通史　第二編　原始　第二章、多気町史編纂委員会、1992年)。
⑬ 山田猛「1　縄文時代」(『大鼻遺跡』本文編　Ⅷ考察、三重県埋蔵文化財センター、1994年)。
⑭ 奥義次氏のご教示による。
⑮ 奥義次「朱に彩られた森添遺跡」(『図説　伊勢・志摩の歴史――上巻』郷土出版社、1992年)。
⑯ 森川幸雄ほか『天白遺跡　本文編』(三重県埋蔵文化財センター、1995年)。

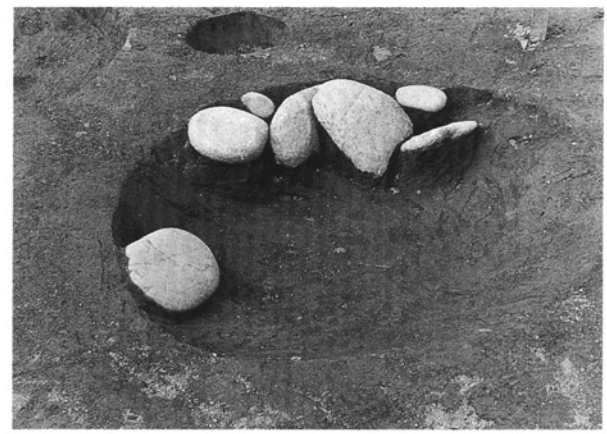
D地区全景（北東から）



A地区全景（北西から）

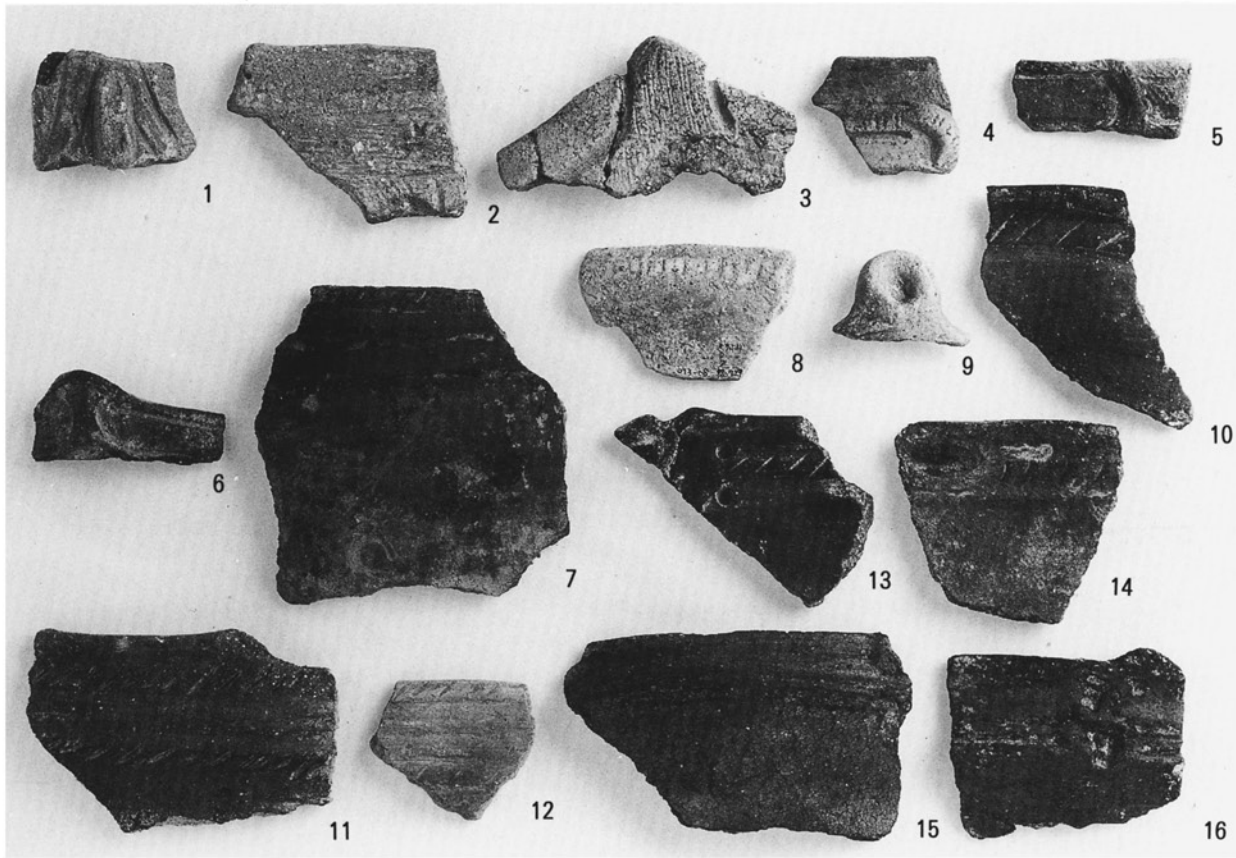
B地区全景（北から）

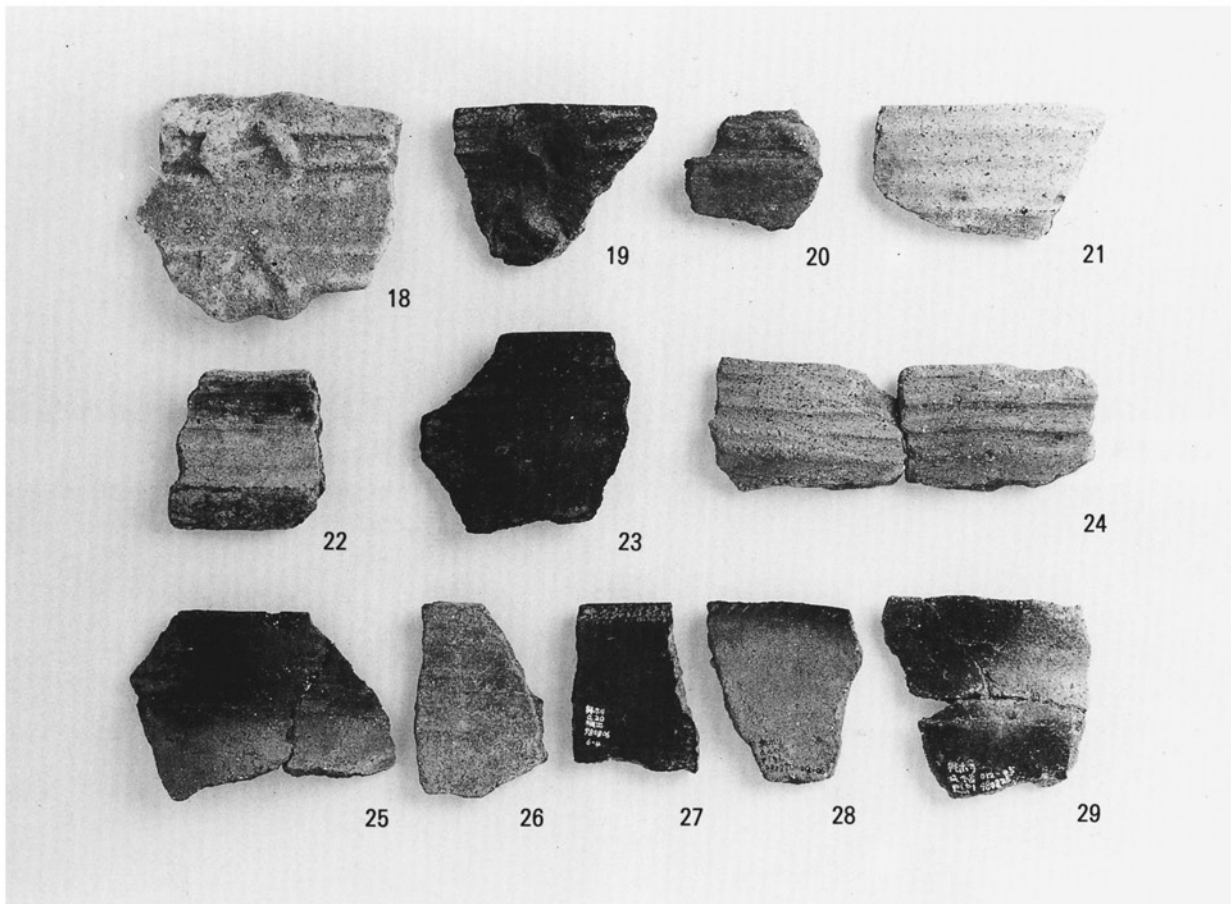
C地区全景（西から）



SK34（北から）

図版 2

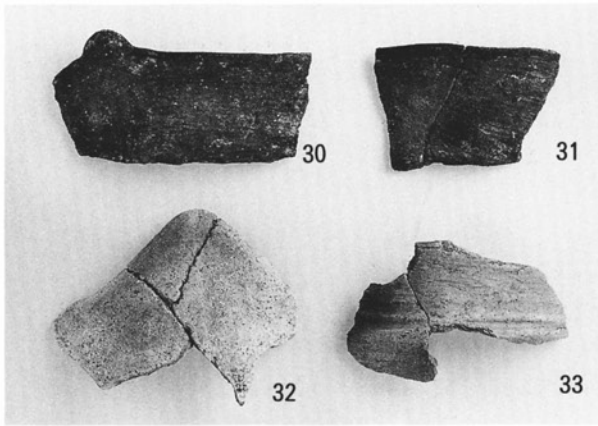


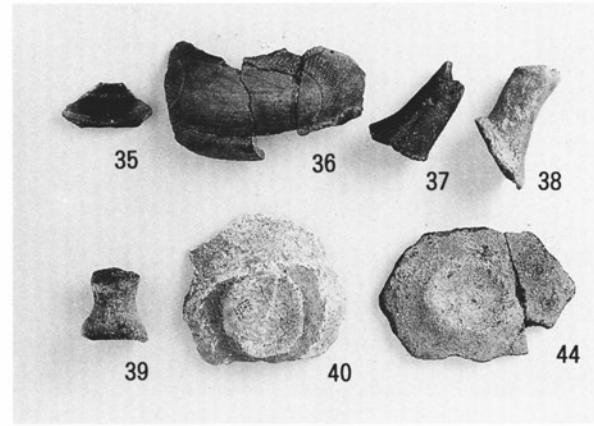


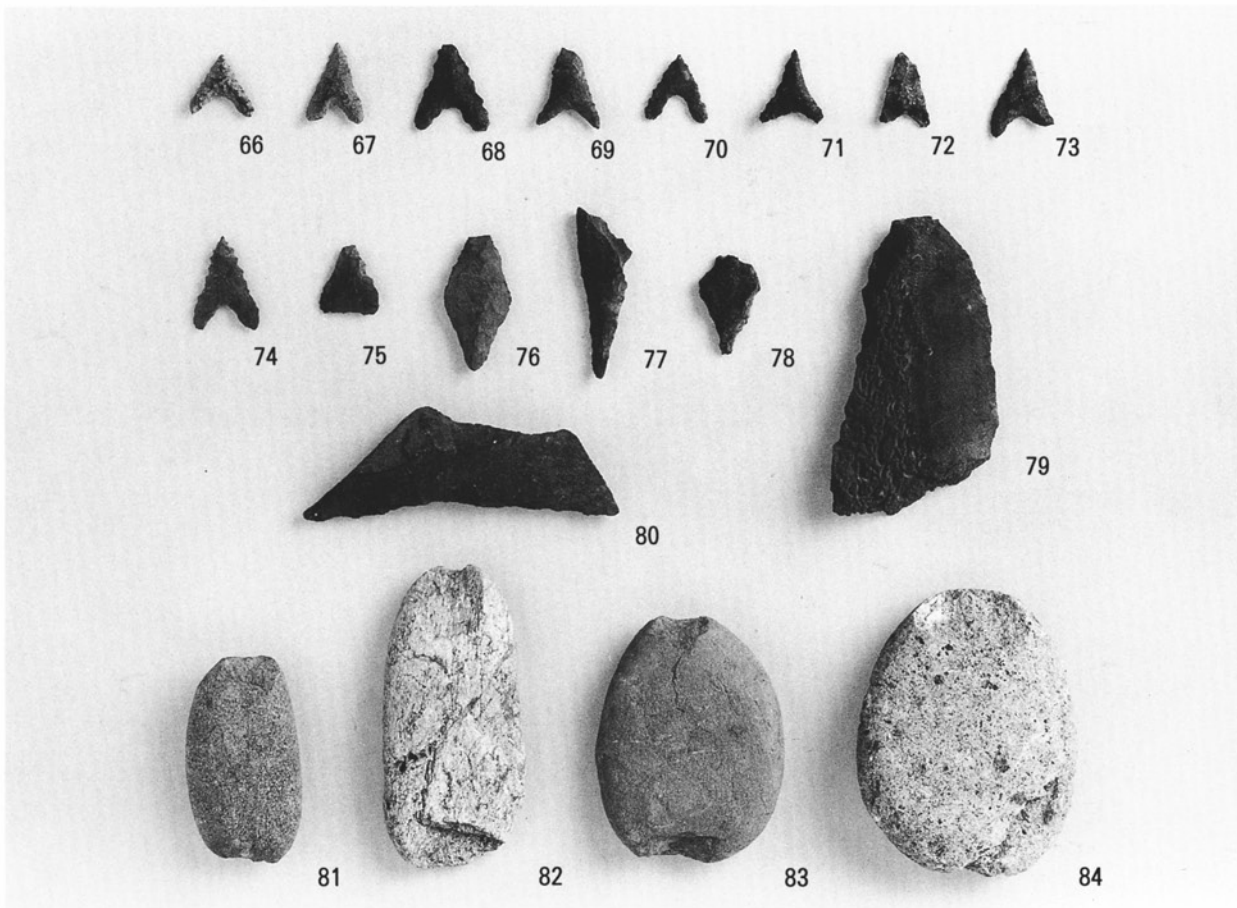
縄文土器

17

34

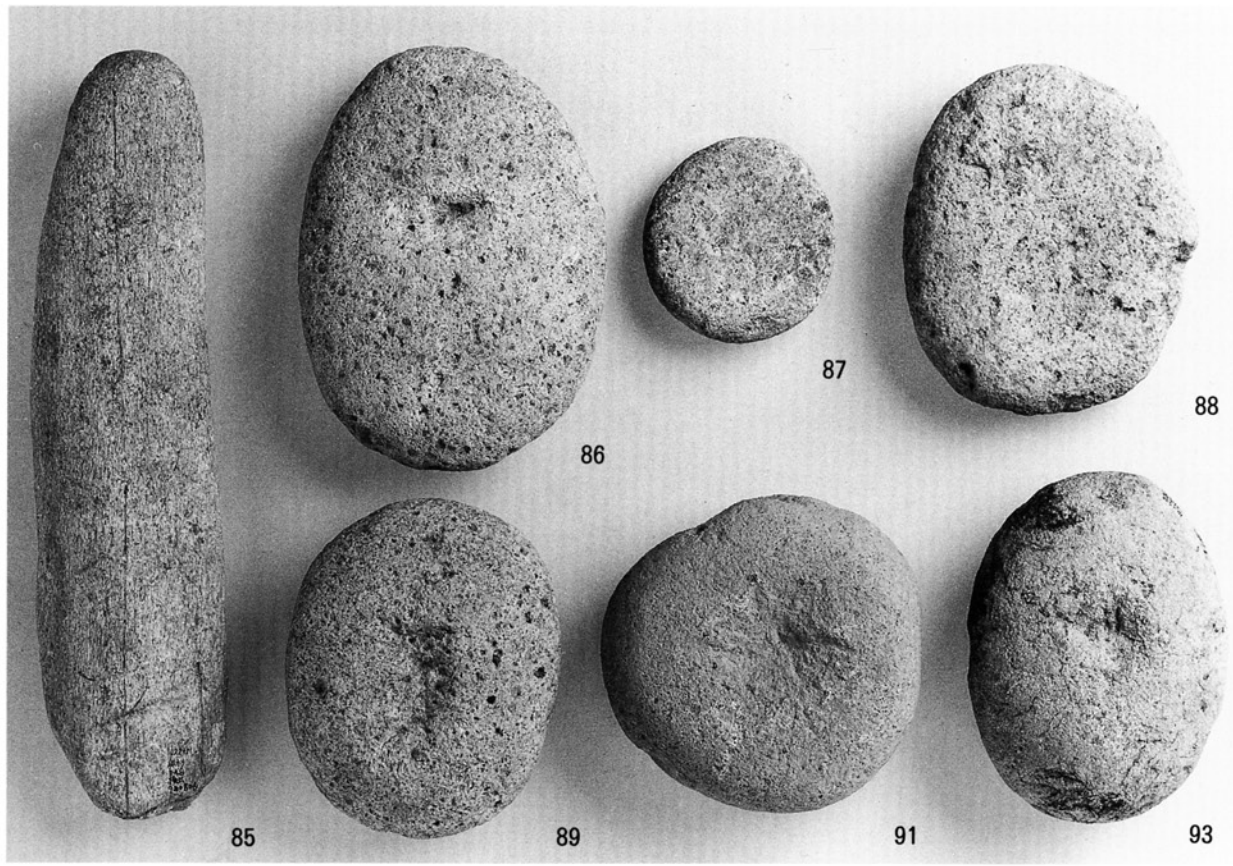

30
31
32
33


35
36
37
38
39
40
44


66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84

石器

図版 4



石器

報告書抄録

ふりがな	おく　ほり　いせきはっくつちょうさほうこく
書名	奥ホリ遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	197
編著者名	松葉　和也
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503番地　TEL 0596－52－1732
発行年月日	西暦　1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
奥ホリ遺跡 (おくほりいせき)	三重県多気郡 (みえけんたきぐん) 多気町牧 (たきちょうまき)	244414	125	34° 30′ 15″	136° 29′ 52″	19980727 ～ 19980904	600 下層110	県営畜産経営 環境整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
奥ホリ遺跡	集落跡	縄文時代後期 中世	土坑 土坑・柱穴	縄文土器・石器 山茶椀・土師器 鍋・土師器皿	

平成11(1999)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 197

奥ホリ遺跡発掘調査報告

－三重県多気郡多気町牧－

1999年（平成11年）3月

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　光出版印刷株式会社